

地域人材の育成と活動促進に関する 調査研究報告書



佐賀県立生涯学習センター

平成22年3月

目 次

I	はじめに	1
1	佐賀県立生涯学習センターにおける調査研究の意義	
2	なぜ、今、学校支援なのか	
II	生涯学習基礎データ調査事業の概要	4
1	調査研究のテーマ	
2	調査研究の趣旨	
3	調査の方法	
4	研究の内容	
5	調査研究委員	
6	調査研究委員会のスケジュール	
III	学校への調査概要	6
1	調査の名称	
2	調査の対象	
3	調査の方法	
4	調査の実施期間	
5	アンケート回収状況	
IV	学校における地域人材の活用に関するアンケート集計結果と考察	7
V	佐賀県学校地域連携コーディネーターへの調査概要	27
1	調査の名称	
2	調査の内容	
3	調査の対象	
4	調査の方法	
VI	学校における地域人材の活用に関するアンケート	28
	佐賀県学校地域連携コーディネーターへのアンケート集計結果	
VII	佐賀県学校地域連携コーディネーターへのアンケート調査結果の考察	34
VIII	事業モデルの開発 平成21年度学校支援ボランティア・コーディネーター養成講座	38
1	はじめに	
2	学校支援に係る地域人材活用の実態と課題	
3	学校支援ボランティア・コーディネーター養成講座の構成と内容	
4	事業モデルの評価（受講者へのアンケート結果から）	
5	おわりに	
IX	生涯学習基礎データ調査研究委員会による調査研究の成果	72
1	佐賀県内の小中学校に対する調査の成果と課題	
2	佐賀県学校地域連携コーディネーターに対する調査の成果と課題	
3	学校支援ボランティア・コーディネーター養成講座成果	
4	まとめにかえて	
X	学校支援について～調査研究委員それぞれの立場から～	78

はじめに

I. はじめに

1 佐賀県立生涯学習センターにおける調査研究の意義

生涯学習基礎データ調査事業 調査研究委員会委員長

永田 誠（西九州大学短期大学部 講師）

平成 20 年度、21 年度の生涯学習基礎データ調査研究委員会（以下 当委員会）では、2 カ年にわたり「地域人材の育成と活動促進に関する調査研究」というテーマのもと、佐賀県における「学校支援」の活動及びボランティアの活用状況について検討を進めてきました。

まず、なぜ、県立の生涯学習センターで「学校支援なの？」という疑問に答えるために、これまでの調査研究事業の変遷を振り返ってみたいと思います。

調査研究委員会では、これまで下表のような調査に取り組んできました。

平成 16 年度	団塊の世代の生涯学習に関する意識調査	学習活動や地域活動に対する 地域人材の把握
平成 19 年度	高齢者の地域・社会活動に関するアンケート	
平成 17 年度	地域人材を活かすための 県立生涯学習センターの事業活用	地域人材の活用に向けた生涯 学習の機会提供に向けた体制 づくりに対する調査
平成 18 年度	NPO とアバンセの連携による 学習機会の創造に関する調査	

これらの調査研究の共通点を推察すると、そこには佐賀県全住民の生涯学習の推進ならびに、それに向けた学習機会・体制の充実方策の検討というねらいが見て取れます。これを言い換えるならば、各市町教育委員会単位において取り組むことが難しい県内全域をエリアとした広範な調査を実施し、今後、各市町で取り組まれるであろう新たな課題について、調査研究の結果をもとに先駆的な事業モデルや視点を提起するという役割を果たしてきたのです。佐賀県立の生涯学習センターとして取り組む調査研究事業は、佐賀県の生涯学習における情報の集約と発信の拠点としての役割を担ってきたと位置づけることができます。

こうした視点から改めて、今回の調査研究のテーマである「学校支援」を振り返ると、これまで取り組んできた地域人材の育成と生涯学習の充実方策についての蓄積を踏まえつつ、地域人材をいかに地域社会において活用するかという課題のもと、その方策の一つとして着目したのが、「地域住民による学校支援に対するボランティア活動」なのです。

これを、やや結論的に述べるならば、以下のように捉えることができます。

- ① 学校を支援する活動により、地域における住民のボランティア活動・社会参画活動の活性化を図る。
- ② 子どもの教育に多様な人材が参画することによる教育効果の向上・充実を図る。
- ③ ①②の結果として、学校・家庭・地域の3者がそれぞれの役割を果たし、またそれぞれの機能を補完しつつ、地域における次世代の担い手育成という命題に対して、「地域全体で育てる」という意識と仕組みを生み出すことが期待できる活動である。

学校支援については、その用語が登場したのは教育基本法改正を契機としたため、それほどの日月を経てはいません。しかし、その中身を見ると、時代状況や直面する課題では異なる部分があるものの、求められる内容や、活動の先に期待される社会ビジョンは、改正前の教育基本法下で取り組まれていた学社連携・融合論や「総合的な学習の時間」における地域人材の活用といった方策と理念的には一致するものです。

また、そうした地域と学校の関係性について歴史的に紐解くならば、地域教育計画論¹やコミュニティ・スクール論²とも共通するものであり、学校支援は、いわば古くて新しい教育活動であると位置づけることができるのではないのでしょうか。

したがって、この学校支援は、単に地域人材の活用方策としてだけでなく、今後の社会教育・生涯学習が、人々の生活の豊かさと地域の共同性の再構築に、どのような役割を果たしていくのかという点においても、実は重要な意義と可能性を有しているのです。

¹ 敗戦直後、戦前の中央集権的な教育に対する深い反省に立ち、教育の地方分権化の方途が模索された。具体的にはカリキュラムの内容に至るまで教育を地域性に貫かれたものとし、学校を地域住民の意思と生活にもとづいて地域単位に再編成しようとする取り組みであった。1950年代初頭には各地で行政主導ならびに教育学者主導で教育計画の策定が試みられた。各地の教育計画は、自治体の名を冠して呼ばれ、川口プラン（埼玉県）、本郷プラン（広島県）などが著名である。その後、教育の中央集権化が急速に進められる中で退潮となるものの、70年代の半ばから、教育は地域に根差して行われるべきであり、地域の教育力の見直しが必要であるとの認識から再度、敗戦直後とは異なった次元で、地域教育運動と連動した広がりを見せた。

² 1930年代のアメリカ進歩主義教育思想に発する学校改革論が始まりである。日本には第二次世界大戦後、新教育理論とともに紹介された。その後、海後宗臣や大田堯によって地域教育計画化が進められる。大田の指導した本郷プランは地域の独自の教育計画を創出する実践として取り組まれ、地域に教材を求めるだけでなく、教育による社会改造を意図するものであった。

2 なぜ、今、学校支援なのか

「学校支援」という用語が登場したのは、平成 18 年 12 月の改正教育基本法の公布・施行が契機でした。直接的な関係としては、第 13 条に「学校、家庭及び地域住民等の相互の連携協力」を設けて、地域社会を構成する者が自らの役割と責任を自覚して一体的に取り組むことが規定されたことによります。この教育基本法の改正を踏まえ、平成 20 年 6 月には社会教育法が一部改正され、学校、家庭、地域住民の連携協力を進めるための具体的内容が規定されるなど、学校教育を支援する社会教育の役割が付記されたのです。また、平成 20 年 7 月には、教育振興基本計画が出され、家庭、地域の連携・協力を強化することで、社会全体の教育力を向上することが謳われ、「地域ぐるみで学校を支援し、子どもたちを育む活動の推進」を目的に学校支援活動を促進する「学校支援地域本部事業」が設立されるに至ります。

こうした学校支援活動が登場した背景には、

- ①飽和状態にある学校教育のスリム化による教員の教育者としての専門性の発揮
- ②地域における子どもの育成・学校教育への関心の高まりによる地域・家庭と学校との信頼関係の再構築

の 2 点が企図されていると推察されます。

ここには、これまでも盛んに指摘されていた学校、家庭、地域の個々の教育機能の低下と三者間の関係性の希薄化により、地域における生活の補完・扶助機能の低下が、子どもの育ちにおいて緊急の課題として横たわっていたからです。

こうした厳しい現代社会の状況を打破するための方策の一つとして、学校支援があるのですが、こうしたねらいを実現するためには、その実践の中で学校を住民の力を再結集する地域のシンボルタワーとして位置させ、そこを拠点とした住民参画の教育・子育て構造を生み出すことが重要であると考えます。これは、一見すると、飽和状態の学校に更なる役割・機能を付与するように見えるかもしれませんが、実は中心的な担い手は保護者などの地域住民であり、その力を地域の子どもを育てるために結集させ、仕組みとして定着させることができた際には、本来、学校が持つべきではないですが担い手がないために抱えざるを得なかった機能・役割を本来あるべき地域に戻し、そして部分的であるにせよ支援者の力を借りることで、より一層の教育充実を図ることも可能となるのではないのでしょうか。さらに、家庭・地域の側から見るならば、子どもを「我が子」から「地域の子ども」へ、子育てを「親が育てる」から「皆で育てる」へといった教育・子育て観の転換であり、それこそが地域教育計画の現代的再創造とつながっていくものと確信します。

**生涯学習基礎データ
調査事業の概要**

Ⅱ 生涯学習基礎データ調査事業の概要

1 調査研究のテーマ

地域人材の育成と活動促進に関する調査研究

2 調査研究の趣旨

教育基本法の改正により第13条に「学校、家庭及び地域住民等の相互の連携協力」が盛り込まれ、学校教育において家庭及び地域住民と連携を図ることが大きな課題の一つとなっている。平成20、21年度の生涯学習基礎データ調査事業では、県民の学習成果や学習意欲を地域活動につなげる方策の一つとして、多くの学校で取り組まれている学校支援ボランティアの活動に着目した。

学校支援ボランティアは、すでに多くの学校で登録制度があり、実際に活動も行われているが、児童生徒の実態や児童生徒を取り巻く環境は、従来とは大きく異なっており、知識や技術、意欲だけでは期待される成果を得ることは難しい。

そこで、学校支援ボランティアの活動が学校にとってもボランティアにとっても有意義なものとなるにはどのような支援が必要なのかを調査し、その結果を生涯学習・社会教育機関に提供するとともに、県立生涯学習センターとしての新たな事業を企画、立案、評価を行う。

3 調査の方法

佐賀県内の小・中学校と※学校地域連携コーディネーターへ質問紙にて、学校支援活動の取り組み状況を調査する。

※佐賀県教育委員会では、国（文部科学省）の「学校支援地域本部事業」を活用して、平成20年度から、学校と地域の連携のモデルとして県内8市町11地域に学校地域連携コーディネーターを配置している。

4 調査研究の内容

調査研究内容は以下の3点である

- ①佐賀県内小中学校における学校支援に関する活動の実施・導入状況と課題の把握
- ②佐賀県学校地域連携コーディネーター配置事業における現状と課題の把握
- ③学校支援の周知、基礎的な技能の習得を目指した事業プログラムの企画実施

5 調査研究委員

委員氏名	所属・職名
委員長 永田 誠	西九州大学短期大学部幼児保育学科講師
大串 弘子	有田町教育委員会学校教育課副課長
大橋 隆司	小城市教育委員会こども課長
鴻上 哲也	伊万里市立立花小学校教頭
横尾 敏史	NPO法人鳳雛塾事務局長
船木 幸博	佐賀県社会教育・文化財課社会教育主事 (H21.4月～H22.3月)

※所属・職名については平成22年3月現在

6 調査研究委員会のスケジュール

年度	回	期 日	内 容
平成20年度	1	1月30日	<ul style="list-style-type: none"> 研究の方向性の検討 学校支援の実態について
	2	2月10日	<ul style="list-style-type: none"> 調査の対象について アンケートの検討①
	3	3月26日	<ul style="list-style-type: none"> アンケートの検討② 次年度の課題について
平成21年度	準備	4月～8月	<ul style="list-style-type: none"> アンケート原案作成、検討 アンケート完成 アンケートの実施準備
	調査 実施	9月1日～18日	<ul style="list-style-type: none"> 学校へアンケート調査実施
	1	9月18日	<ul style="list-style-type: none"> 学校へのアンケートの結果、考察 事業モデルの検討①
	調査 実施	10月13日	<ul style="list-style-type: none"> コーディネーターへアンケート調査実施
	2	11月18日	<ul style="list-style-type: none"> コーディネーターへのアンケートの結果・考察 事業モデルの検討②
	3	1月21日	<ul style="list-style-type: none"> 学校支援ボランティア・コーディネーター養成講座開催について 調査報告書の内容検討
	4	3月26日	<ul style="list-style-type: none"> 調査報告書について 総括と来年度への課題

学校への調査

Ⅲ 学校への調査概要

1 調査の名称

学校における地域人材の活用に関するアンケート調査

2 調査の内容

佐賀県内の小中学校における学校支援に関する活動の実施・導入状況と課題の把握

3 調査の対象

佐賀県内の国立・公立小中学校

4 調査の方法

質問紙法

佐賀県教育委員会の電子掲示板（羅針盤さが）を使ってアンケート調査実施

5 調査の実施期間

平成21年9月1日～9月18日

6 アンケート回収状況

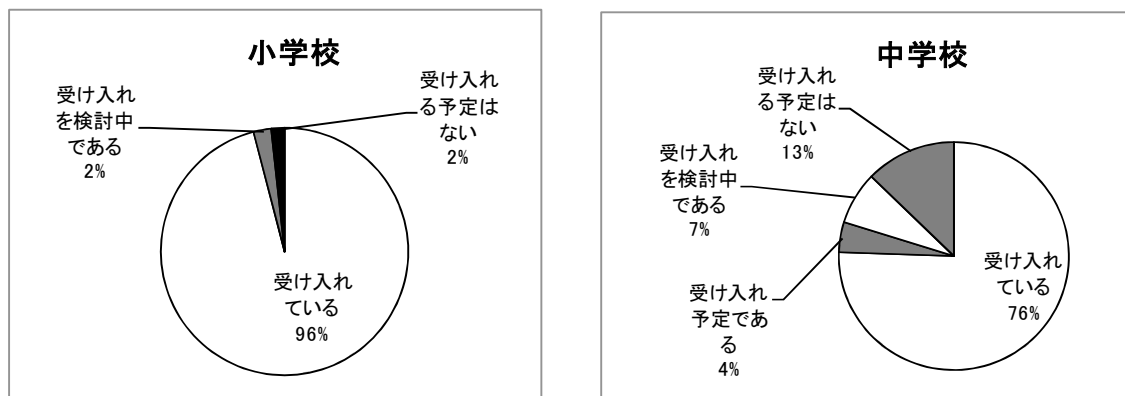
	小学校	中学校	全体
学校数	176	97	273
回収数	173	94	267
回収率	98.3%	96.9%	97.8%

IV 学校における地域人材の活用に関するアンケート集計結果と考察

調査票の集計結果は以下のとおりである。なお、問1は学校名、回答者名であるため、省略した。

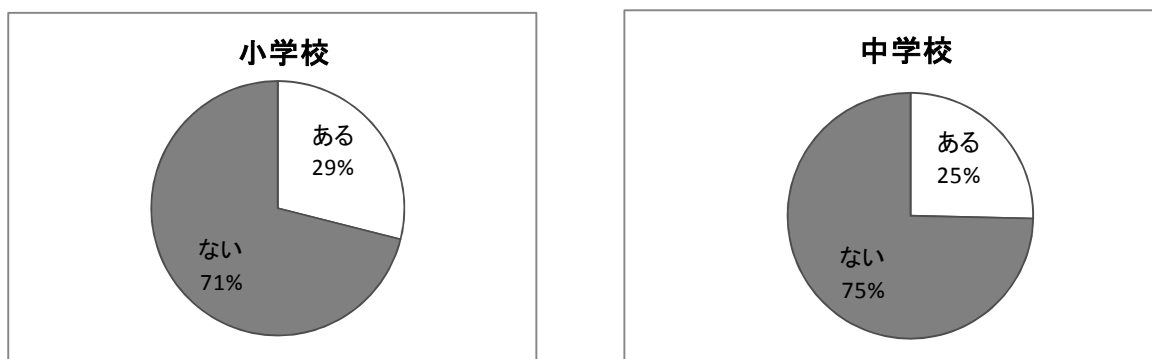
問2 ボランティア受け入れの状況

小学校は「受け入れている」、「受け入れを検討中」を含め98%、中学校は「受け入れている」、「受け入れ予定」、「受け入れを検討中」を含め87%となっている。
ボランティアを活用した学校教育が多くの学校で行われている。



問3 ボランティア受け入れ担当の校務分掌の有無

小学校が29%、中学校25%がボランティアを受け入れる際の担当の校務分掌があるということだった。具体的な校務分掌名としては、小学校では、「地域連携担当」、「教務主任」、「ボランティア活動」、中学校は、「教務主任」、「地域ボランティア」などが多かった。



【担当分掌名】

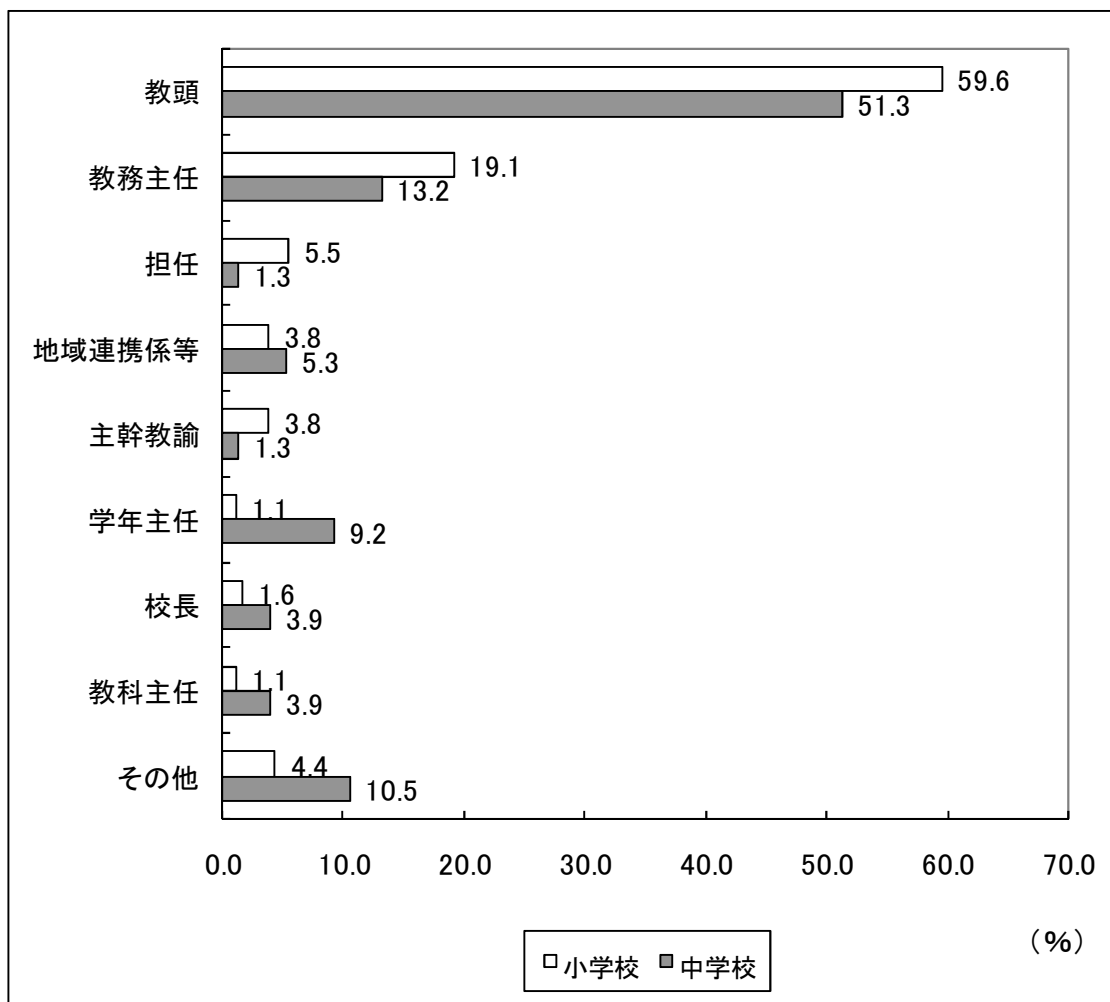
- ・地域連携担当
- ・教務主任
- ・ボランティア活動
- ・生涯学習、社会教育担当 ・生活部
- ・総合担当 ・学力向上担当 ・図書担当
- ・地域教育協議会実行委員
- ・地域コミュニティ ・渉外部
- ・地域支援教育ネットワーク
- ・地域人材開発部 ・地域ボランティア
- ・地域連携コーディネーター
- ・地域連携担当
- ・ボランティア育成事業 ・クラブ担当
- ・開かれた学校づくり推進チーム
- ・魅力ある学校 ・心の教育推進部

【担当分掌名】

- ・教務主任
- ・地域ボランティア
- ・学年主任
- ・図書館教育
- ・ボランティア活動
- ・総務部研修係

問4 学校側のボランティア受入担当者

小学校、中学校共に「教頭」の割合が最も高く、小学校 59.6%、中学校 51.3%だった。次に「教務主任」で、小学校 19.1%、中学校 13.2%だった。学校側のボランティア受入担当者は全体の半数近くが教頭ということがわかった。

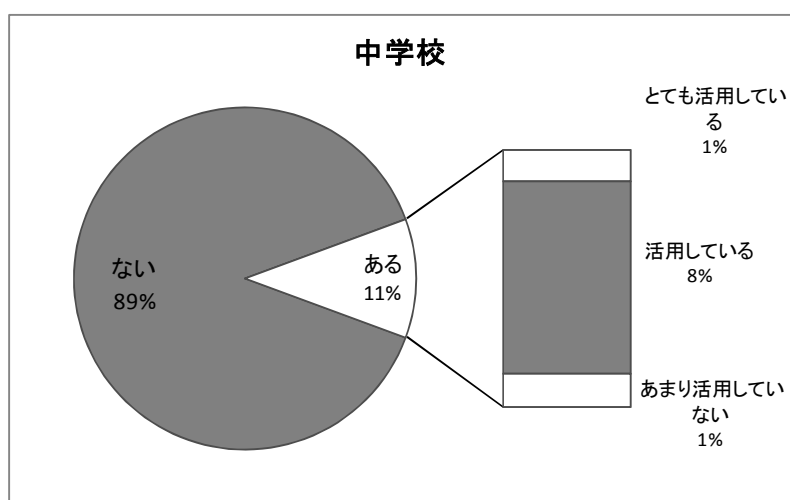
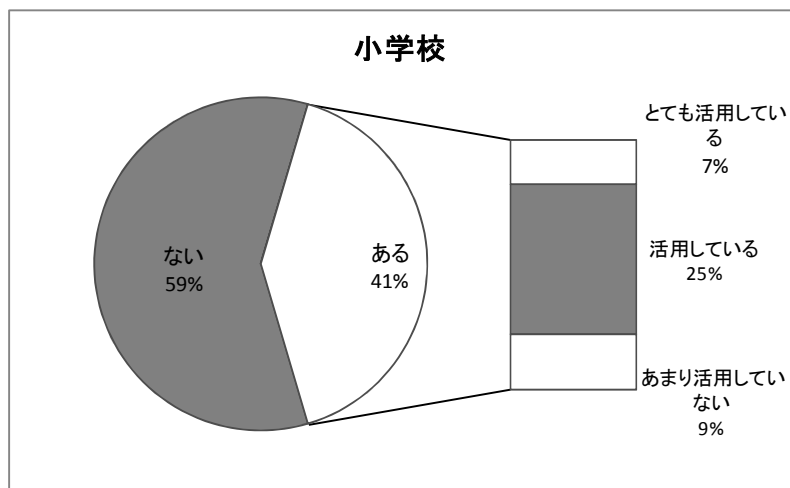


その他の内訳

小学校	<ul style="list-style-type: none"> ・内容に応じて教頭、主幹教諭、教務主任、学年主任が対応している ・担当分掌としてボランティア担当者はいるが、読み聞かせボランティアは校長、安全ボランティアや父親サポート隊は教頭、授業での学習支援は各担任が実質的な窓口となっている ・司書教諭、養護教諭 ・該当する学校行事の担当者 ・ボランティアを依頼するその教科、クラブ等の担当者
中学校	<ul style="list-style-type: none"> ・研究主任、当該行事企画・立案者 ・分掌事務担当 ・寮、指導課長、園長 ・教育相談担当 ・図書館教育担当 ・V S (ボランティアサービス活動) 委員会担当 ・そのときのボランティア支援を必要とする担当

問5 ボランティアの人材バンクの有無と活用状況

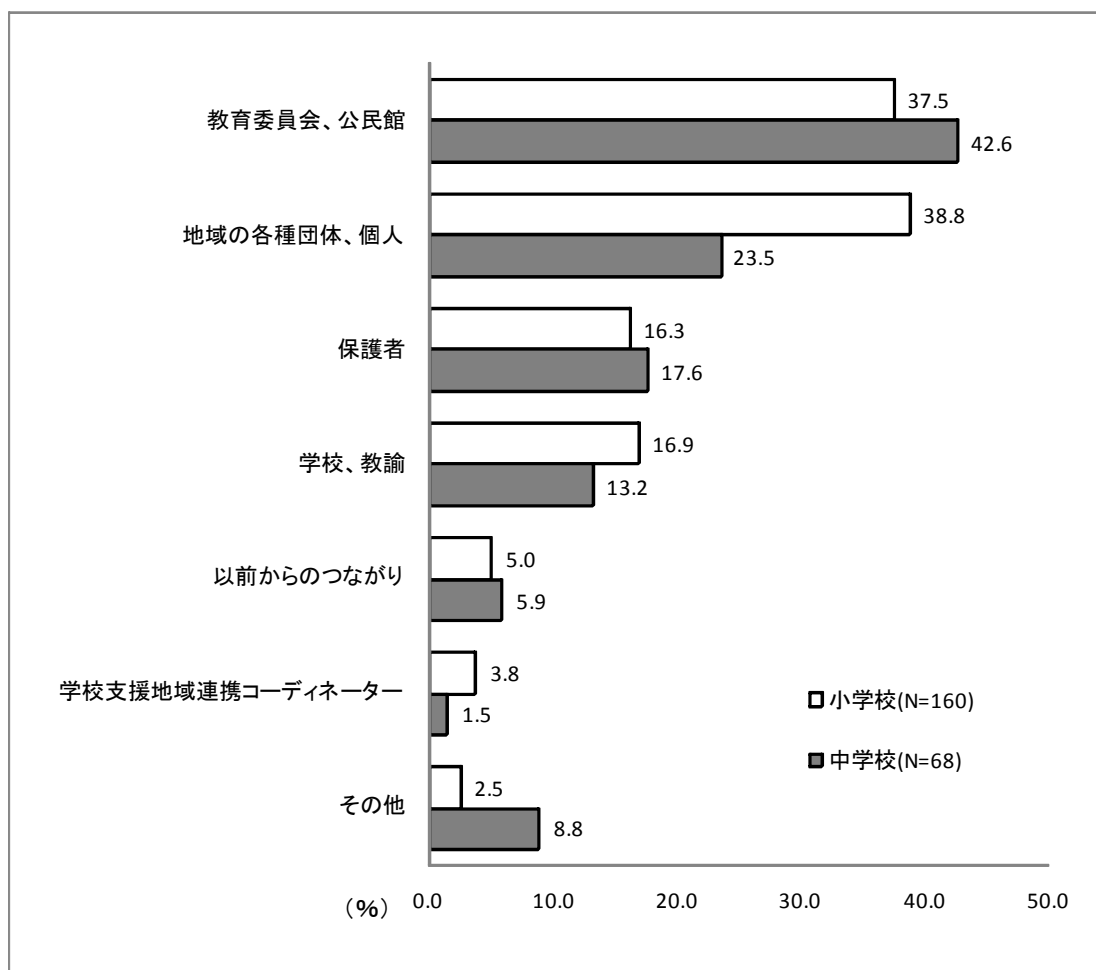
学校独自のボランティア人材バンクは小学校 59%、中学校は 89%が作成していない。学校にボランティア人材バンクがあると回答したところでも、あまり活用されていない学校もあった。



問6 ボランティアの人材情報 (複数回答)

ボランティアの人材情報は、「教育委員会、公民館」と回答した割合が小学校 37.5%、中学校 42.6%、「地域の各種団体、個人」が小学校 38.8%、中学校 23.5%とこのようなどころからボランティア人材情報を得ているところが多い。

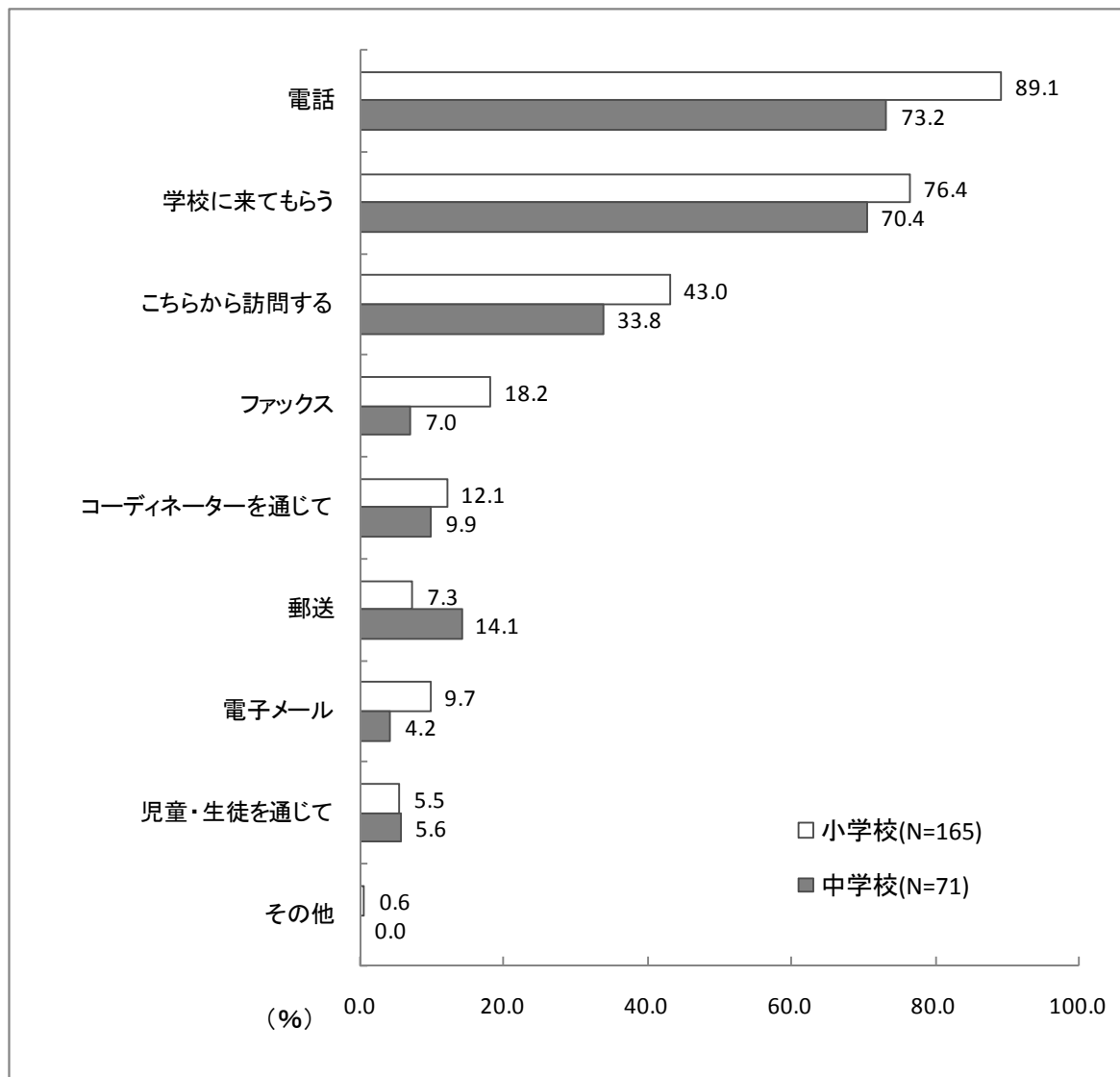
情報収集の方法としては、問 6-2 どのようにしての自由記述回答からグラフの7つの項目にあがっているところから情報を得て、①直接交渉、②地域団体の会合に参加して直接呼び掛ける、③子どもを通じて保護者へボランティア募集をする、④公民館やコーディネーターが作成した人材バンクを活用する。といった方法等で人材情報を収集している。



※地域の各種団体＝JA、老人クラブ、婦人会、社会福祉協議会、区長会等

問7 ボランティアとの打合せ方法（複数回答）

「電話」と回答した割合が小学校 89.1%、中学校 73.2%と最も高い。次に「学校に来てもらう」が小学校 76.4%、中学校 70.4%、3 番目には「こちらから訪問する」が小学校 43.0%、中学校 33.8%である。学校の担当者とボランティアが直接話をしながらのやりとりが多い。

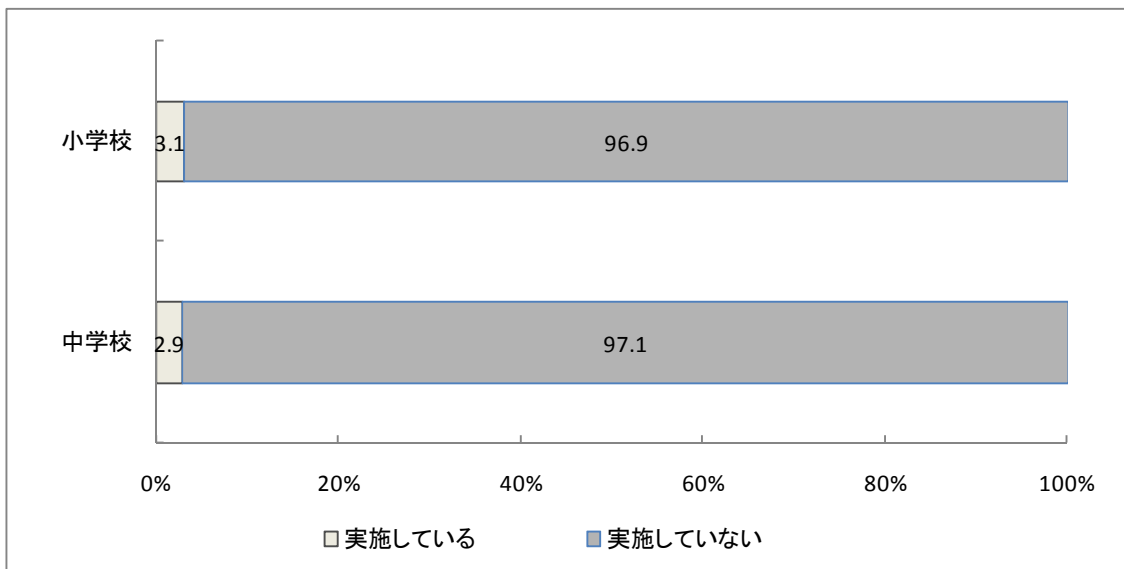


その他の内訳

- ・定期的に打合せ会を開いている（読み聞かせボランティア）

問8 教員対象のボランティア研修の状況

教員対象のボランティア研修を実施しているのは、小学校 3.1%、中学校は 2.9%と、ほとんど実施されていない。

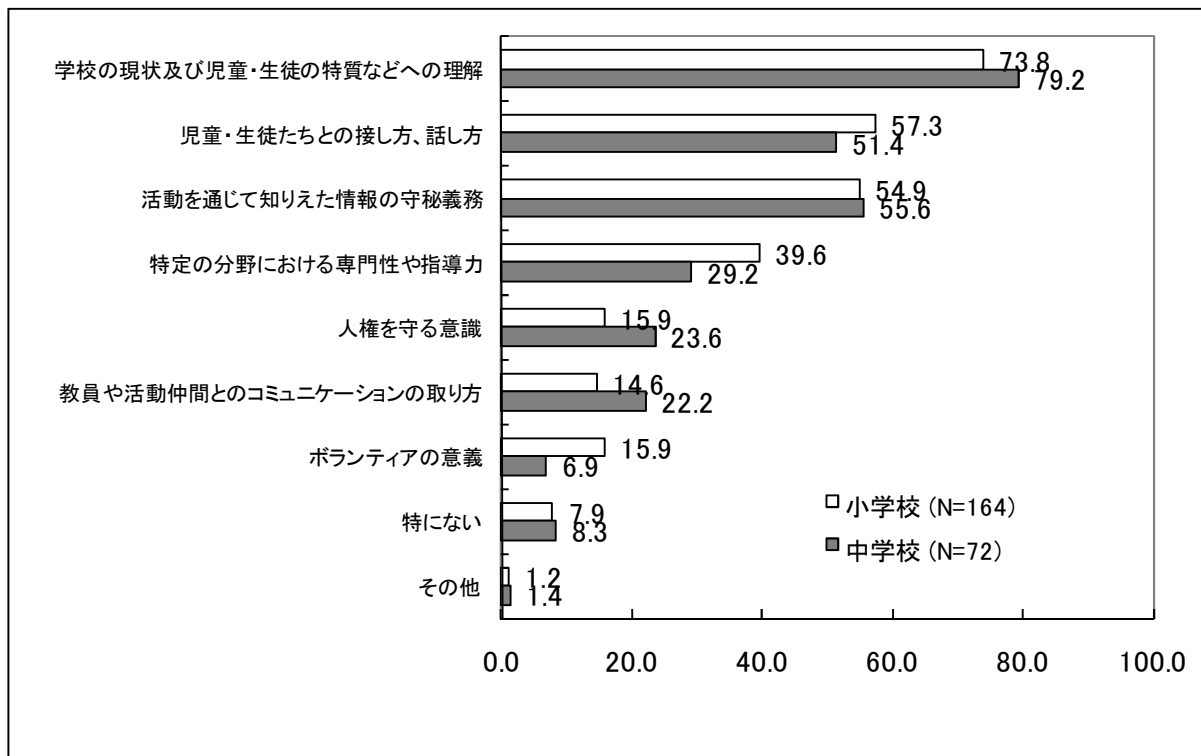


実施していると回答した学校の研修内容

小学校	<ul style="list-style-type: none"> ・ ボランティアの内容、受け入れ体制を共通理解する ・ 前年度、ボランティア体験学習を経験した担当学年と新年度にボランティア体験学習をする担当者との内容確認 ・ 校内研修において、学校支援連携事業の目的および学校におけるメリット等の共通理解を図っている ・ 地域学習会、地域学習研修会 ・ 有効活用するための事前打合せの重要性（役割の明確化） ・ 教職員が授業展開を考え、指導におけるリーダーシップを発揮することの重要性
中学校	<ul style="list-style-type: none"> ・ 一度全員集合して、時間帯や活動内容等の確認を行う会をもっている ・ 県が計画している外部指導者への研修会

問9 ボランティアに身につけておいてほしいこと (複数回答)

「学校の現状及び児童・生徒の特質などへの理解」が小学校 73.8%、中学校 79.2%、次に「児童・生徒たちとの接し方、話し方」が小学校 57.3%、中学校 51.4%、「活動を通じて知りえた情報の守秘義務」についてが、小学校 54.9%、中学校 55.6%である。学校や児童生徒に関することに、小学校、中学校とも共通していた。

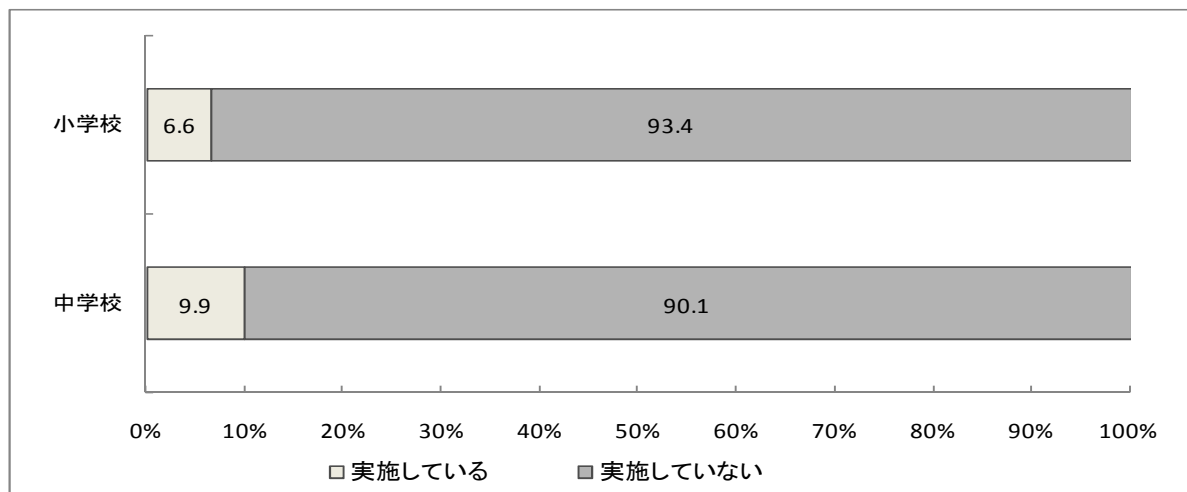


その他の内訳

小学校	ボランティアへの意欲、前向きさ
中学校	学校の方針に沿った活動

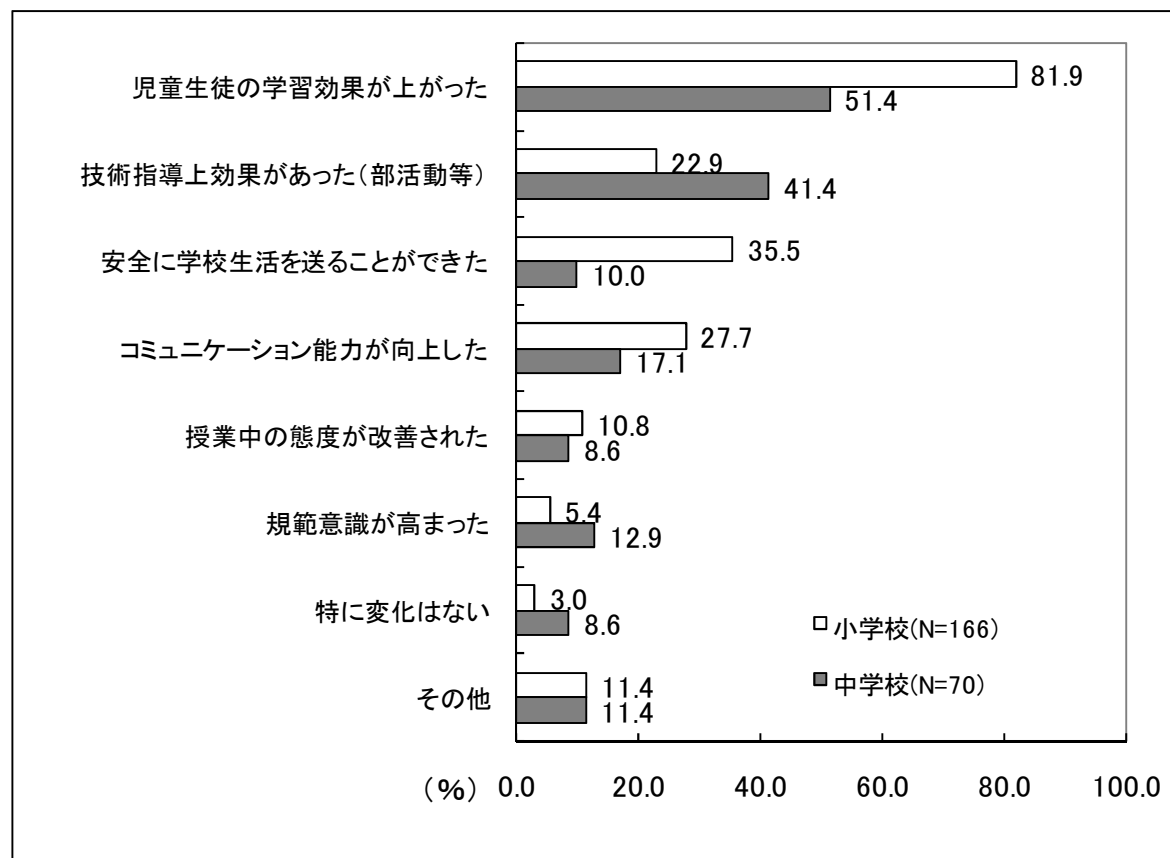
問10 ボランティア対象の事前研修の実施状況

ボランティア対象の事前研修を実施しているのは、小学校は 6.6%、中学校は 9.9%だった。問9で「学校の現状、児童生徒のことを知ってほしい」と思っているが、ほとんど研修は実施されていない。



問 11 ボランティア活用による子どもたちの変化 (複数回答)

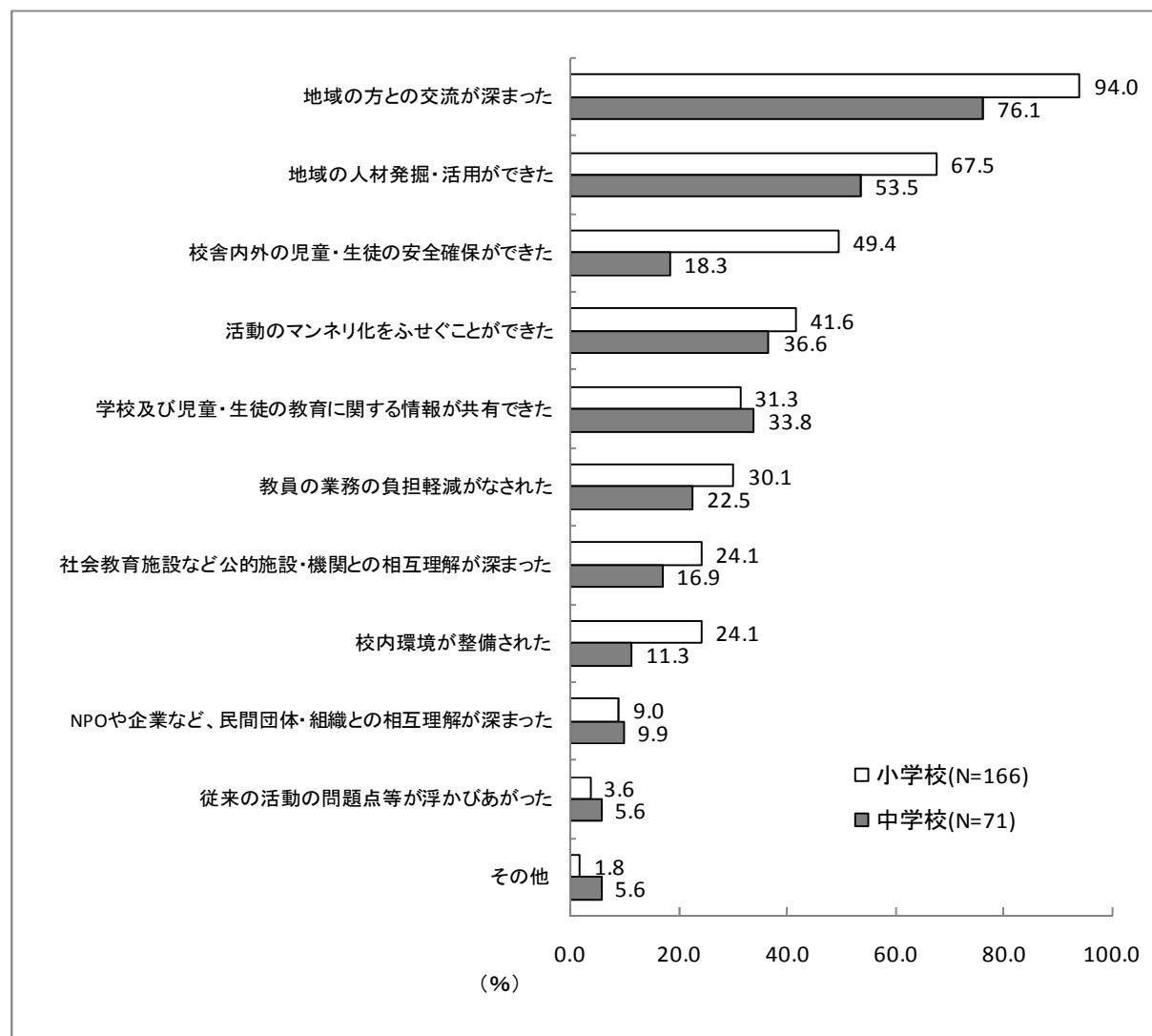
小学校・中学校共に「児童生徒の学習効果が上がった」の割合が 81.9%と 51.4%と最も高い。2番目に高いのは小学校が「安全に学校生活を送ることができた」が 35.5%、中学校は「部活動等の技術指導上の効果」が 41.4%と高い。ボランティア活用することにより、児童生徒の学習効果に変化がでている。



小学校	<ul style="list-style-type: none"> ・児童に地域を愛する心が醸成されつつある。 ・読書ボランティアからの読み聞かせで、読書への意欲が増した。 ・人権意識が高まった ・感謝の気持ちを持つことができるようになった ・落ち着いた行動をとるようになってきた ・外部の方に入ってもらったことで刺激を受けている ・学校環境が整い、児童はいい環境の中で学校生活を送ることができた ・学習への興味・関心が高まった ・体験学習等、興味関心が高まり、目標達成の充実感を味わうことができた
中学校	<ul style="list-style-type: none"> ・地域の一員として地域の方に見守られている意識を改めてもてた ・地域の中で挨拶が良くできるようになり、生活面でも落ち着きが見られるようになった ・読書に対する関心が高まり、静かに話を聴く態度が育まれた ・朝の時間が落ち着いて過ごせるようになった ・毎年2回の除草作業や剪定作業を通じて、校内環境が美しくなり、生徒の情緒面も落ち着いている

問 12 ボランティア受け入れによる学校側のメリット （複数回答）

小学校・中学校共に「地域の方との交流が深まった」の割合が最も高く小学校 94.0%、中学校 76.1% だった。続いて「地域の人材発掘・活用ができた」が小学校 67.5%、中学校 53.5%の順になっている。3位に上がっているのが小学校は「校舎内外の児童・生徒の安全確保ができた」49.4%、中学校は「活動のマンネリ化を防ぐことができた」が 36.6%であった。ボランティアを受け入れたことによって、学校と地域が連携できたことが学校側のメリットになっている。

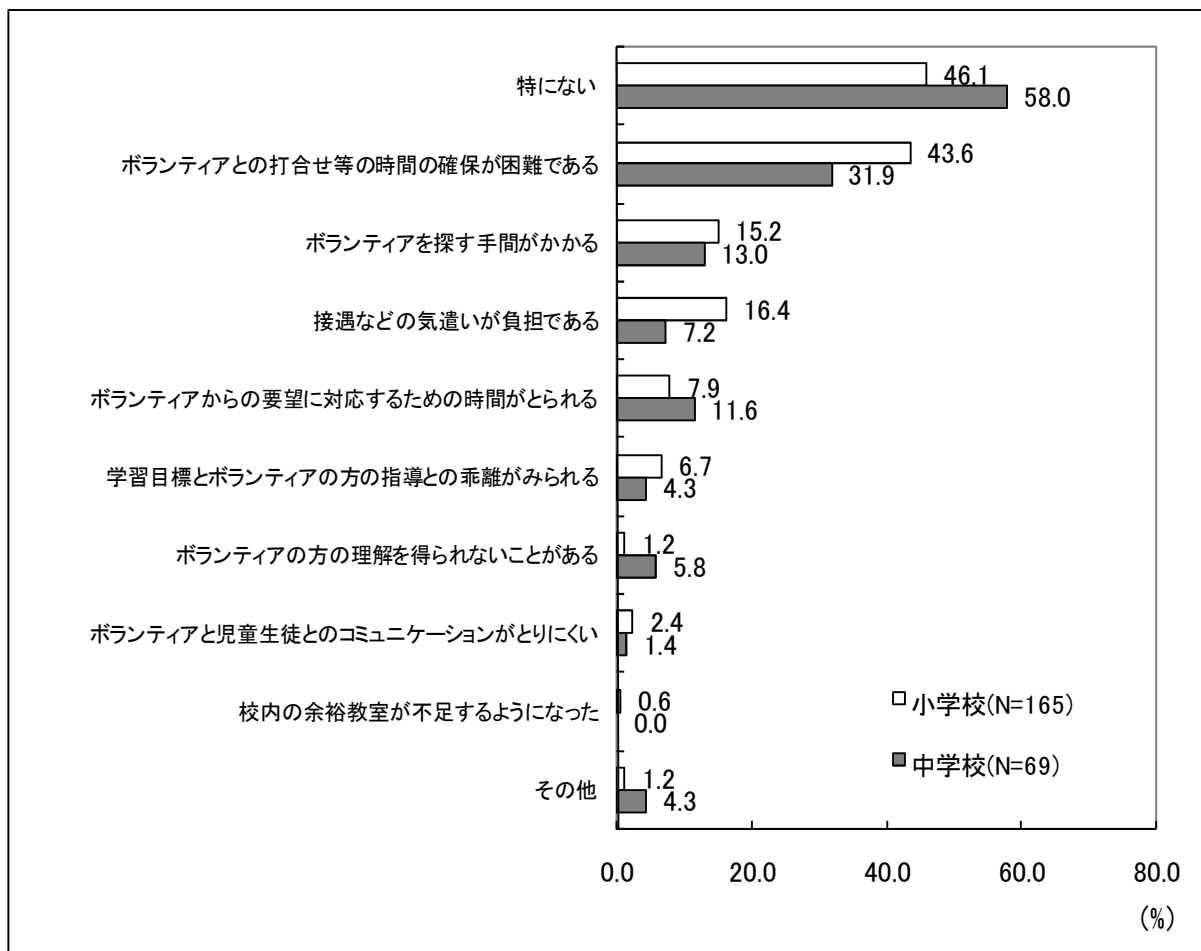


その他の内訳

小学校	<ul style="list-style-type: none"> ・地域の方々の学校への理解や協力関係が深まった ・子どもたちの実態を理解し、ボランティアがそんなに難しいものではないことをわかってもらった ・ボランティアの方に個別に指導してもらうことも多く、子どもたちが楽しく学習できた
中学校	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒の学力、技量の向上 ・生徒の知識・技能や意欲を高めることにつながった ・地域の方が学校に関心を持ってくれる ・きめ細かい学習指導ができた

問 13 ボランティア受け入れによる学校側のデメリット (複数回答)

デメリットは「特にない」が半数を占めているが、小学校・中学校共に「打合せの時間確保が困難である」の割合が小学校 43.6%、中学校 31.9%と最も高い、次に「ボランティアを探す手間がかかる」が小学校 43.6%、中学校 31.9%、「接遇などの気遣いが負担である」が小学校 16.4%、中学校 7.2%、「ボランティアからの要望に対応するための時間がとられる」が小学校 7.9%、中学校 11.6%となっている。ボランティアを受け入れることにより、時間がとられるということが課題となっている。

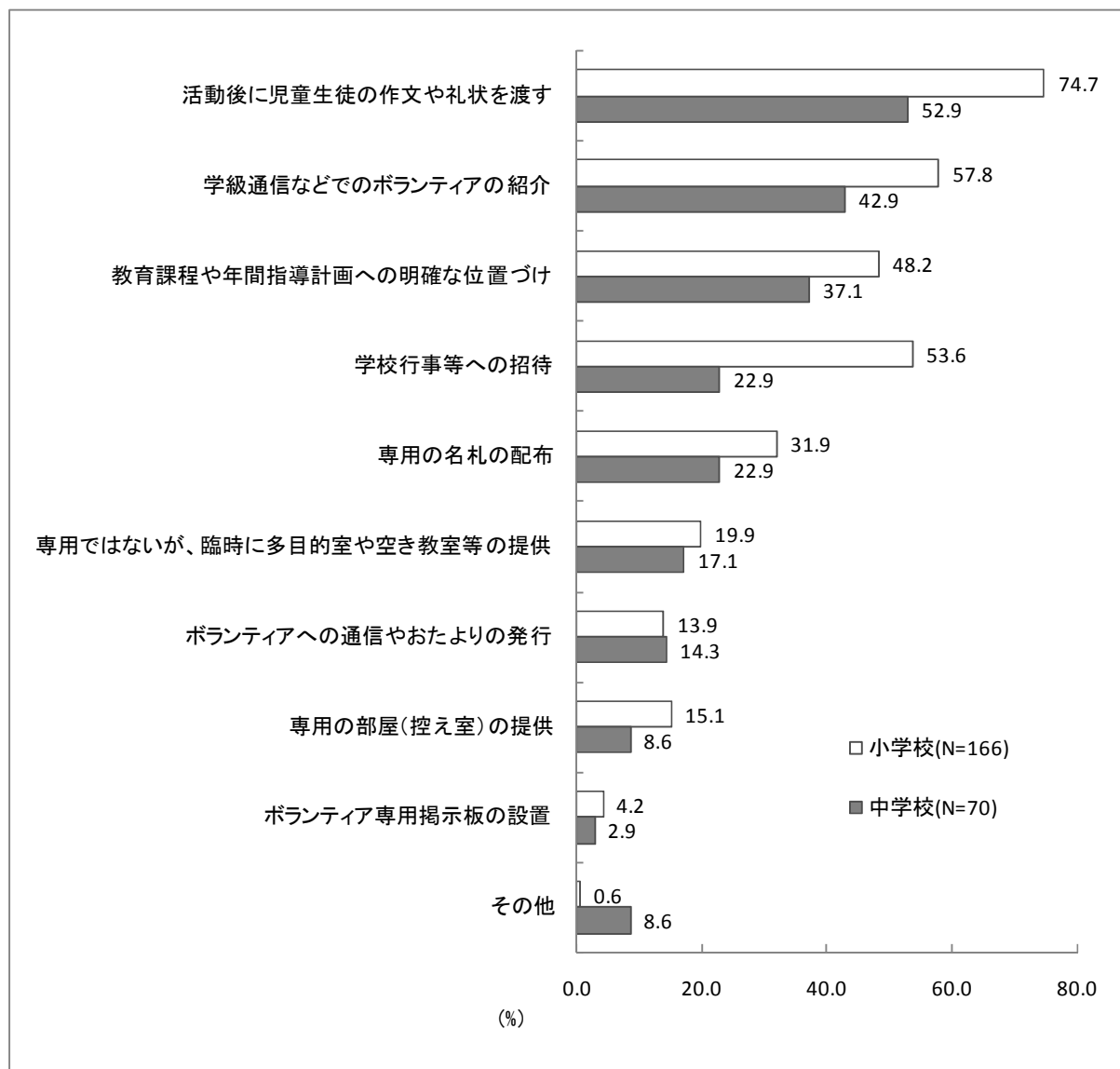


その他の内訳

小学校	<ul style="list-style-type: none"> ・ボランティア受け入れに対する教職員の受け止め方の違い。(「助かる」と感じる職員、「都合がつくときだけなら授業の一貫性が保てない」と感じる職員というように温度差がある) ・旅費、安全面の確保
中学校	<ul style="list-style-type: none"> ・学校とボランティアの意識のずれによる指導の不徹底 ・事業を継続していくための予算が年々少なくなっており、その確保が難しい。 ・経費がかかる

問 14 ボランティア受け入れ時の準備・配慮等 (複数回答)

「活動後に児童生徒の作文や礼状を渡す」と回答した割合が小学校 74.7%、中学校 52.9%と最も高い。次に「学級通信などでのボランティアの紹介」が小学校 57.8%、中学校 42.9%、3 番目は小学校が「学校行事等への招待」53.6%、中学校が「教育課程や年間指導計画への明確な位置づけ」が 37.1%である。

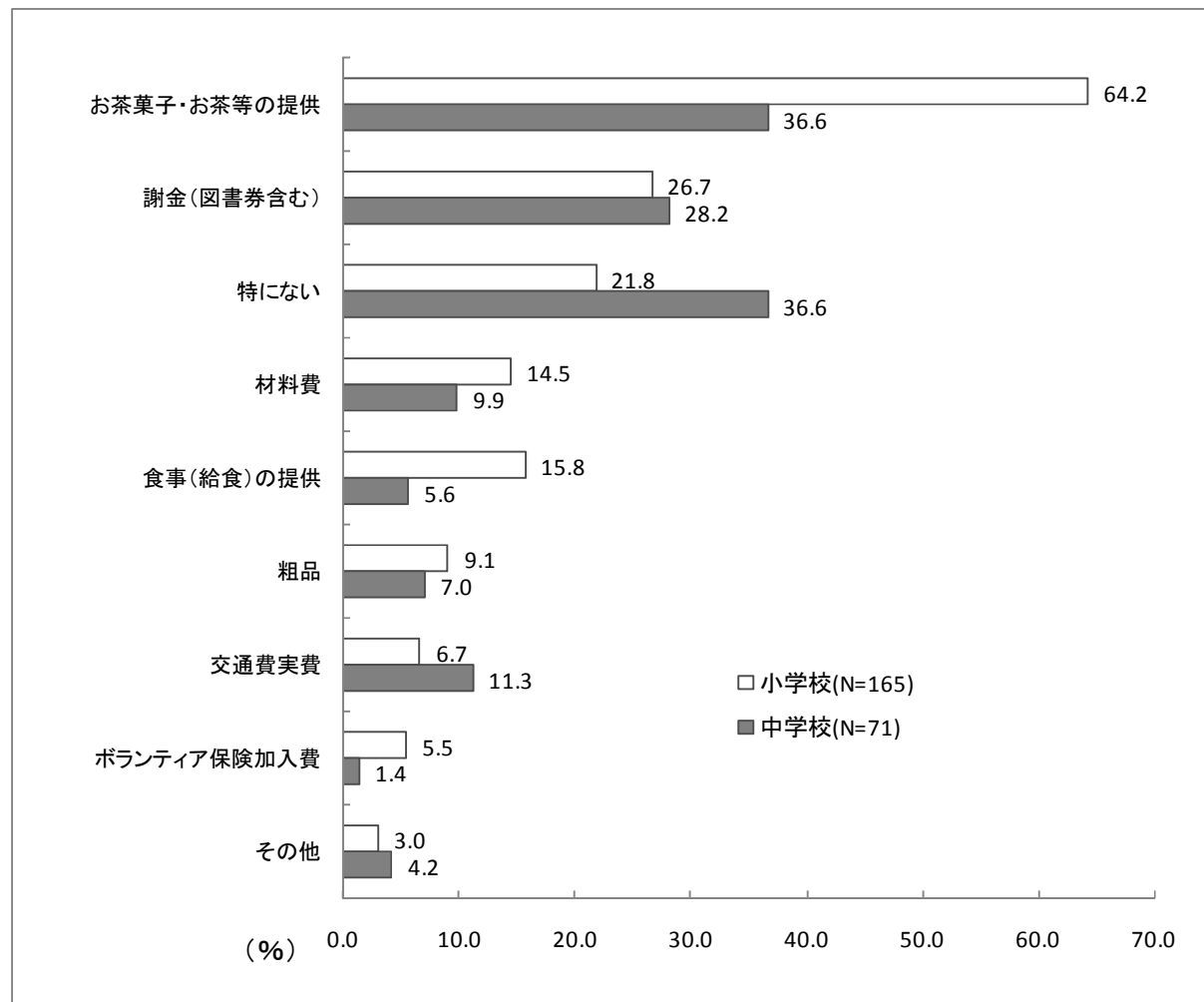


その他の内訳

小学校	・事前の十分な打ち合わせ(期日・時間・内容等)
中学校	・特になし ・紹介する本の内容の適正

問 15 ボランティアへの費用負担 (複数回答)

「お茶菓子・お茶などの提供」と回答した割合が小学校 64.2%、中学校 36.6%と最も高い。「特にない」の割合は小学校 21.8%、中学校は 36.6%である。この結果から全体の 6 割～8 割は何らかの費用負担をしていることがわかった。



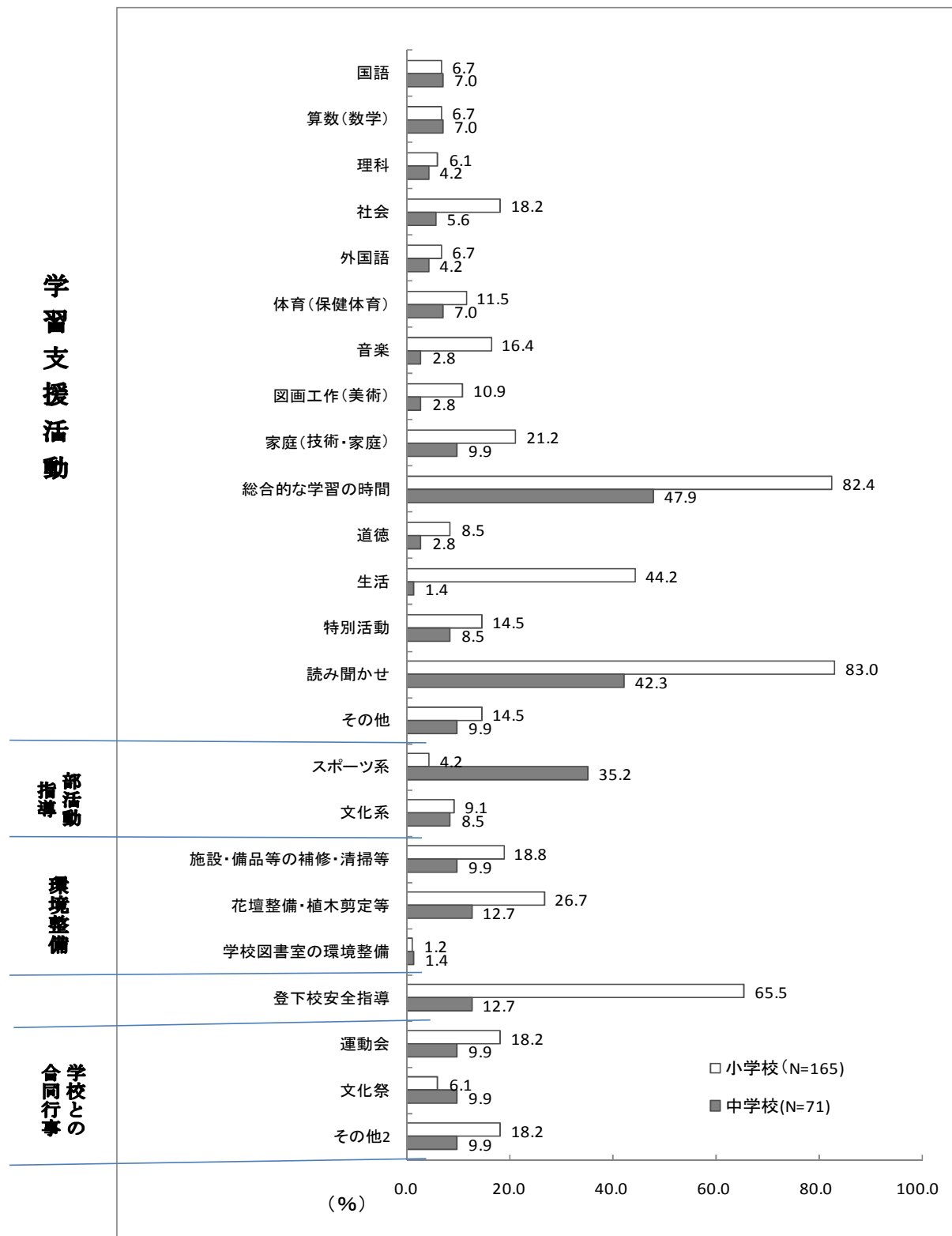
その他の内訳

小学校	<ul style="list-style-type: none"> ・別会合のときに茶菓子の差し入れ ・稲作ボランティアについては、学習田の維持管理面で謝礼を出しているが、その他のボランティアに対しては一切無い ・感謝の会への招待 ・年度末に花や手作り品・賞状を差し上げている ・ボランティアの種類によって多少ちがうが、クラブは、お茶菓子等程度のお礼を子どもたちの手紙と一緒に、最後の日に渡している
中学校	<ul style="list-style-type: none"> ・スポーツボランティアには町から1回(3時間)につき3,000円の報酬、スポーツ保険、研修会参加費がある ・活動によっては校長・教頭・PTA会長等のお礼の言葉だけのこともある

問 16-1 平成 20 年度ボランティア活用状況

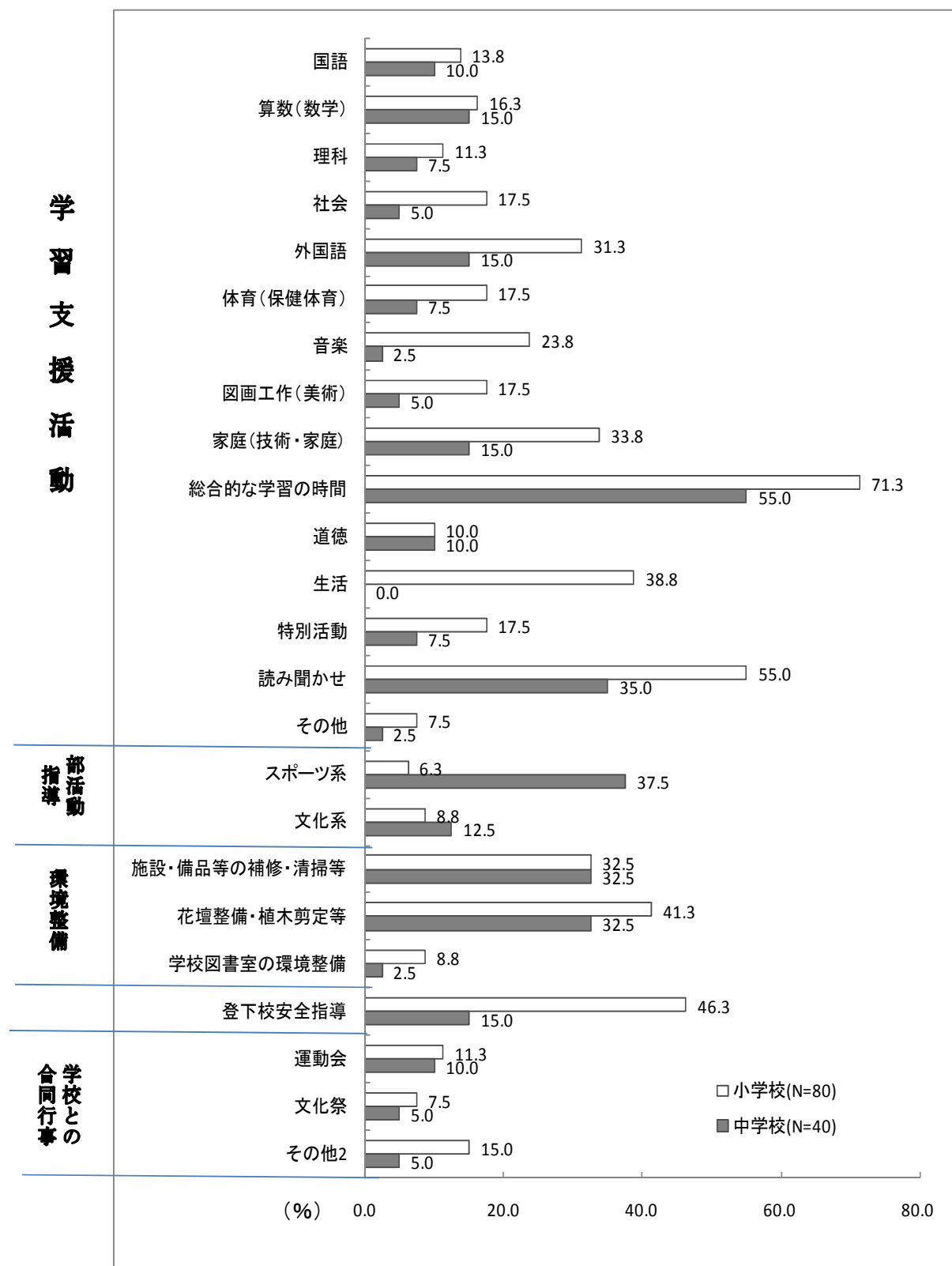
小学校は、1 番多いのは、「読み聞かせ」が 83%、2 番目に「総合的な学習時間」82.4%、3 番目は「登下校安全指導」44.2%となっている。中学校は、1 番多いのは、「総合的な学習の時間」が 47.9%、2 番目は「読み聞かせ」42.3%、3 番目は「部活動指導 スポーツ系」35.2%となっている。

「読み聞かせ」と「総合的な学習時間」で多くの学校がボランティアを活用している。このことは小学校中学校とも共通している。そして、小学校は「登下校安全指導」、中学校は「部活動指導 スポーツ系」でボランティアを活用しているということが特徴的である。



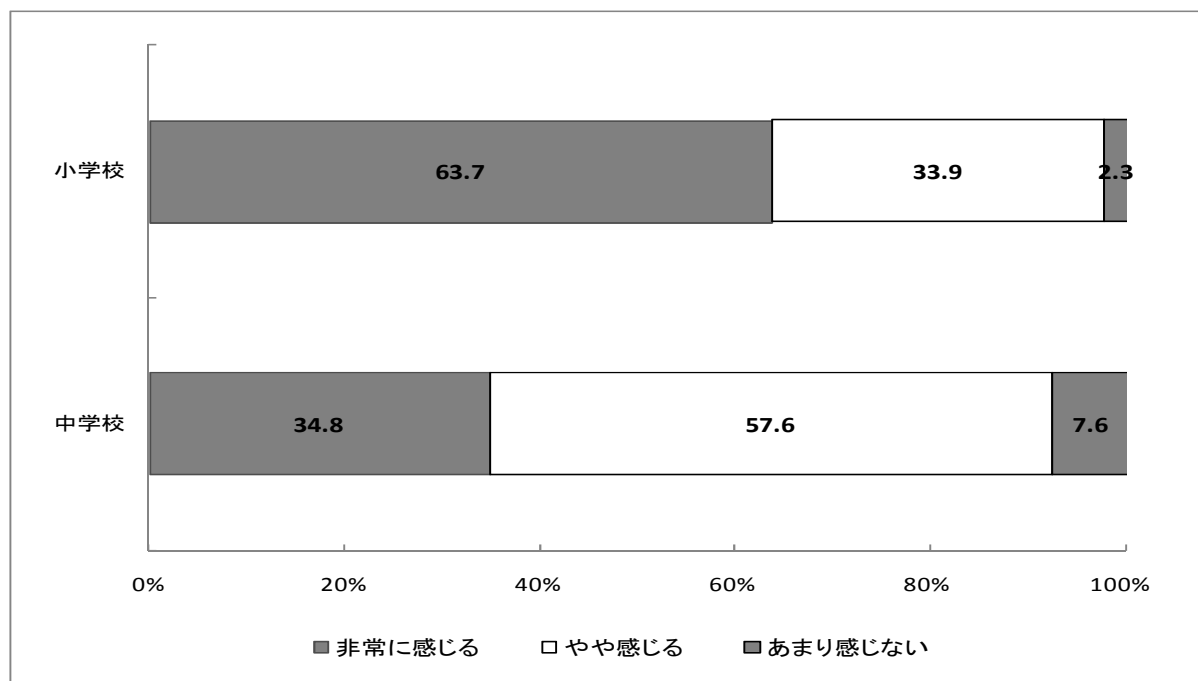
問 16-2 今後、ボランティアを実施したい内容

問 16-1 にあるように現在すでに活用している内容は今後も実施していきたいというところが多い。今後ボランティアを導入したいものとしては、小学校は「外国語」、中学校は「環境整備」のボランティア活用の割合が高くなっている。



問 17 地域からの支援の必要性

小学校が 97.4%、中学校が 92.4%とほとんどの学校が地域からの支援の必要性を感じている。



学校へのアンケート調査票

学校における 地域人材の活用に関する調査へのご協力のお願い

平成21年9月1日

学校長 各位

佐賀県立生涯学習センター（アバンセ）
館長 大草 秀幸

佐賀県立生涯学習センター（アバンセ）では、平成7年3月の開館以来、県内の生涯学習の振興に資するため、さまざまな事業を展開しております。このアンケートは、生涯学習調査データ研究事業の一環として行うものです。

さて、教育基本法の改正により第13条に「学校、家庭及び地域住民等の相互の連携協力」が盛り込まれ、学校教育において家庭及び地域住民と連携を図ることが大きな課題の一つとなっています。本調査は、学校での教科・特別活動・その他の学校運営に関する活動に対し、地域住民などからの支援の実態と学校教育における効果を明らかにし、今後の連携協力を図るための基礎資料とするものです。

ご回答は、全て統計的に処理いたしますので、ご回答いただいた学校や記入者の方が特定できるようなかたちでは公表致しません。大変お忙しい中、お手を煩わせますが、本調査の趣旨をご理解の上、ご協力いただきますようお願いいたします。

※本調査でいう「ボランティア」とは、学校や学校教育活動を場として、学校を支援するボランティア活動、または、そのような場でボランティア活動を行う人を指します。なお、ここでいうボランティアには、行政が予算や人材を配当して、学校図書館や理科室の整備等を行う支援ボランティア（支援員）は含めないこととします。

◇アンケート調査票記入にあたって◇

- 1 回答は、調査票の選択肢にある記号を**回答欄にご記入**をお願いします。
「その他」を選ばれた場合は、具体的内容をご記入ください。
- 2 調査票にご記入いただきましたら、**9月18日（金）までに**Eメールにて下記アドレスに送信してください。（FAX送信でも結構です。）
- 3 この調査につきまして、ご質問などがございましたら下記までお問合せください。

【問い合わせ先】 佐賀県立生涯学習センター（アバンセ）担当：角（すみ）
住 所：佐賀市天神三丁目2-11
電 話：0952-26-0011
FAX：0952-25-5591
E-mail：syougai@avance.or.jp

学校における地域人材の活用に関するアンケート

※ 回答は、各問いの右側にある回答欄に数字をご記入ください。

該当する選択肢がない場合は、その他の 内に具体的にご記入ください。

問1 貴校及び、ご回答いただく方のことを教えてください。

1 学校名	<input type="text"/>
2 回答者名	<input type="text"/>

問2 貴校ではボランティアの受け入れ（または依頼）をしていますか？

- 1 受け入れている →問3に進んでください
 2 受け入れ予定である →問16の今後実施したい内容に進んでください
 3 受け入れを検討中である →問16の今後実施したい内容に進んでください
 4 受け入れる予定はない →問17に進んでください

問2
<input type="text"/>

問3 貴校ではボランティアの受け入れを担当する校務分掌がありますか？

- 1 ある（担当分掌名：） 2 ない

問3
<input type="text"/>

問4 現在、ボランティアを受け入れるとき学校側の主な窓口となる担当者はだれですか？

- 1 校長 2 教頭 3 主幹教諭 4 教務主任 5 学年主任
 6 教科主任 7 担任 8 地域連携係等
 9 その他

問4
<input type="text"/>

問5 貴校にはボランティアの人材バンクがありますか？

- 1 ある 2 ない →問6に進んでください

問5
<input type="text"/>

問5-1 あると回答された方は、ボランティアの人材バンクを活用していますか？

- 1 とても活用している 2 活用している 3 あまり活用していない
 4 活用していない

問5-1
<input type="text"/>

問6 貴校では、どこからボランティアの人材情報をどのようにして収集していますか？

記入例)

記入例)問6-1
●●●公民館

→ どのようにして

記入例)問6-2
公民館が作成した人材バンクより情報提供を受けている。

どこから

問6-1
<input type="text"/>

→ どのようにして

問6-2
<input type="text"/>

問7 ボランティアの方との打合せはどんな方法で行っていますか？（複数回答可）

- 1 電話
- 2 学校に来てもらう
- 3 こちらから訪問する
- 4 ファックス
- 5 電子メール
- 6 コーディネーターを通じて
- 7 児童・生徒を通じて
- 8 郵送
- 8 その他

--	--

問7

問8 貴校では教員対象にボランティア受け入れのための研修を実施していますか？

- 1 実施している
- 2 実施していない →問9に進んでください

問8-1 どのような研修ですか？

--

問8

問9 ボランティアの方に身につけておいてほしいと思われることは何ですか？（複数回答可）

- 1 学校の現状及び児童・生徒の特質などへの理解
- 2 ボランティアの意義
- 3 人権を守る意識
- 4 活動を通じて知りえた情報の守秘義務
- 5 児童・生徒たちとの接し方、話し方
- 6 教員や活動仲間とのコミュニケーションの取り方
- 7 特定の分野における専門性や指導力
- 8 特になし
- 9 その他

--

問9

問10 貴校ではボランティアを対象に事前の研修を実施していますか？

- 1 実施している
- 2 実施していない

問10

問11 ボランティアを学校で活用することで、子どもたちにどのような変化がありましたか？

（複数回答可）

- 1 特に変化はない
- 2 コミュニケーション能力が向上した
- 3 児童生徒の学習効果が上がった
- 4 技術指導上効果があった（部活動等）
- 5 規範意識が高まった
- 6 授業中の態度が改善された
- 7 安全に学校生活を送ることができた
- 8 その他

--

問11

問12 ボランティアを受け入れたことによる学校としてのメリットを教えてください。(複数回答可)

- 1 地域の方との交流が深まった
- 2 校舎内外の児童・生徒の安全確保ができた
- 3 社会教育施設など公的施設・機関との相互理解が深まった
- 4 NPOや企業など、民間団体・組織との相互理解が深まった
- 5 地域の人材発掘・活用ができた
- 6 活動のマンネリ化をふせぐことができた
- 7 従来の活動の問題点等が浮かびあがった
- 8 校内環境が整備された
- 9 教員の業務の負担軽減がなされた
- 10 学校及び児童・生徒の教育に関する情報が共有できた
- 11 特にない
- 12 その他

問12

問13 ボランティアを受け入れたことによる学校としてのデメリットを教えてください。(複数回答可)

- 1 校内の余裕教室が不足するようになった
- 2 接遇などの気遣いが負担である
- 3 ボランティアとの打合せ等の時間の確保が困難である
- 4 ボランティアの方の理解を得られないことがある
- 5 ボランティアと児童生徒とのコミュニケーションがとりにくい
- 6 ボランティアを探す手間がかかる
- 7 ボランティアからの要望に対応するための時間がとられる
- 8 学習目標とボランティアの方の指導との乖離がみられる
- 9 特にない
- 10 その他

問13

問14 貴校では、ボランティアを受け入れる際、学校でどのような準備、配慮を行っていますか？

(複数回答可)

- 1 教育課程や年間指導計画への明確な位置づけ
- 2 専用の部屋(控え室)の提供
- 3 専用ではないが、臨時に多目的室や空き教室等の提供
- 4 専用の名札の配布
- 5 学校行事等への招待
- 6 ボランティア専用掲示板の設置
- 7 学級通信などでのボランティアの紹介
- 8 ボランティアへの通信やおたよりの発行
- 9 活動後に児童生徒の作文や礼状を渡す
- 10 その他

問14

問15 ボランティアに対して何らかの費用負担をしていますか？（複数回答可）

問15

- 1 謝金（図書券含む） 2 粗品 3 交通費実費
 4 材料費 5 お茶菓子・お茶等の提供 6 食事（給食）の提供
 7 ボランティア保険加入費 8 特にない
 9 その他

--

問16 貴校での平成20年度のボランティア活用実績を教えてください。
 また、今後実施したい内容に○をつけてください。

		平成20年度の活用実績		今後実施したい内容
		回数	延べ人数	
学習支援活動	国語			
	算数(数学)			
	理科			
	社会			
	外国語			
	体育(保健体育)			
	音楽			
	図画工作(美術)			
	家庭(技術・家庭)			
	総合的な学習の時間			
	道徳			
	生活			
	特別活動			
	読み聞かせ			
その他				
部活動指導	スポーツ系			
	文化系			
環境整備	施設・備品等の補修・清掃等			
	花壇整備・植木剪定等			
	学校図書室の環境整備			
登下校安全指導				
学校との合同行事	運動会			
	文化祭			
	その他			

問17 貴校では、地域からの支援の必要性を感じますか？

問17

- 1 非常に感じる 2 やや感じる 3 あまり感じない 4 まったく感じない

--

**佐賀県学校地域連携
コーディネーターへの調査**

V 佐賀県学校地域連携コーディネーターへの調査概要

1 調査の名称

学校における地域人材の活用に関するアンケート調査

2 調査の内容

学校地域支援事業という事業が、平成20年度から文科省の委託で始まった。佐賀県としては学校地域連携コーディネーター配置事業の、モデル事業として3年間8市町11地域に11名のコーディネーターを配置して学校支援を推進していくということでスタートしたものである。

コーディネーターの現状把握とコーディネーターからみた学校支援ボランティアについて調査をした。

3 調査の対象

佐賀県学校地域連携コーディネーター配置事業

学校地域連携コーディネーター11名

4 調査の方法

質問紙法

平成21年10月13日に開催された佐賀県主催の「第2回学校地域連携コーディネーター研修講座」にてアンケートの内容について聞き取り・回収

VI 学校における地域人材の活用に関するアンケート 佐賀県学校地域連携コーディネーターへのアンケート集計結果

問1 あなた自身についておたずねします。

1 市町名

- 佐賀市…1名 ●多久市…1名 ●伊万里市…1名 ●小城市…1名
- 嬉野市…1名 ●神埼市…3名 ●有田町 …2名 ●太良町…1名

2 性別

- 女性4名 ●男性7名

3 前職

- ・教職員 …4名
- ・公民館長…1名
- ・会社員 …1名
- ・団体職員…1名
- ・保育士 …1名
- ・未記入 …3名

4 既得免許・資格で、あなたがコーディネートをする際に役立っていると思われる免許や資格がありましたらお書きください。

- ・教育職員免許状
- ・日本語文書処理技能検定
- ・学校カウンセラー
- ・市子連会長や社会教育委員長としての経験
- ・自分自身のボランティア経験

5 コーディネーターの活動拠点はどこですか？

(コーディネーターの仕事をする時どこに出動されますか？)

- ・市町教育委員会…5名
- ・学校 …3名
- ・公民館 …2名
- ・その他
- 公民館と自宅 …1名

問2 どのようにしてボランティアを募集していますか？

- ・公民館で公募
- ・市町広報誌、町民回覧板
- ・町内各組織の会議に出席して協力を呼び掛ける
- ・地域の主な人材に呼びかけ、勧誘する
- ・地域のボランティア団体の中の個人に協力を依頼する
- ・学校との関わりがある団体に出向いて、事業の説明をした上で依頼する
- ・学校の生徒を通じて募集
- ・退職女教師会員に呼びかける
- ・個人的に知り合いを勧誘する
- ・社協や公民館（社会教育課）などに聞き取り、直接交渉

問3 学校との打ち合わせの回数と内容を教えてください。

●年間の打合せ回数

- ・10回未満 3名
- ・20回未満 2名
- ・30回程度 2名
- ・定例週に1回 1名
- ・必要に応じて随時 3名

●打合せ内容：

- ・ボランティア支援の経過報告、内容方策検討、結果反省など
- ・行事への協力依頼
- ・年、月、週の事業計画行事日程の確認
- ・ボランティアの募集状況
- ・学校からのニーズの把握
- ・担当の先生とボランティアとの最終打合せ
- ・材料費

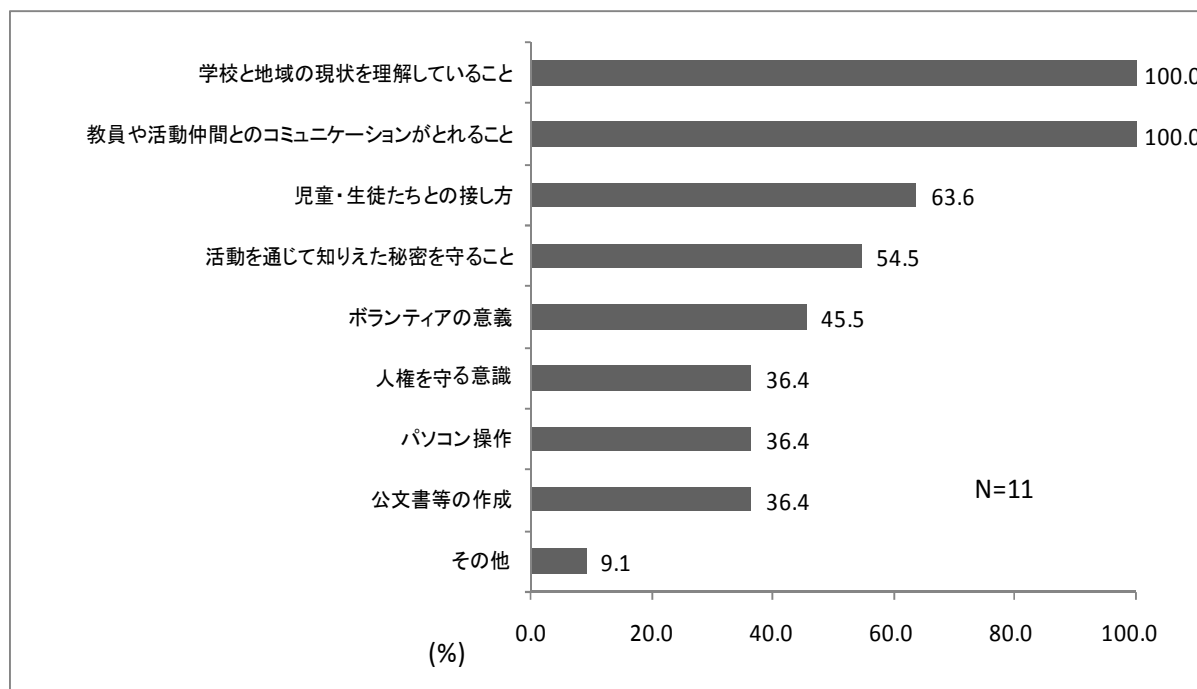
問4 学校との調整やボランティアの派遣で難しいと感じることはありますか？

- ・学校からの要望に見合うボランティアの発掘
- ・人材バンク登録者の支援可能な内容に対して、学校からの支援希望がない場合
- ・ボランティアの学校教育への遠慮（特に高齢者）
- ・校長の異動による学校の雰囲気の違い
- ・団体からの申し出と、学校のカリキュラム（事前学習）の兼ね合いが難しく実現できていない
- ・PTA活動との関係
- ・学校とボランティアとの日程調整
- ・ボランティアを依頼するときの気配り

問5 ボランティアから相談や苦情を受けたことがありますか？また、その内容はどのようなことでしたか？

- ・教師の協力不足
- ・下校ボランティアと送り先家族のトラブル(ボランティアが家の中まで入り過ぎた為)
- ・仕事終了後に(お礼が)言葉だけで終わるといふことの指摘
- ・朝の自習時間の支援で、児童が一生懸命に取り組んでいるのに、ボランティアが入ることでかえって邪魔になっているのではと感じたことがある
- ・広報誌作成のため、よく写真を撮るが「写真ばかり撮って活用されていないのでは？」との言葉や写真撮影を断られることがある
- ・草刈りなど機械用の油の準備
- ・PTAの活動に対するの気づきなど
- ・学校からの支援要望の期日、時間が夏季休暇中ではっきりせず、支援日直前になって決定したため、ボランティアの勤務日との調整が難しくなった。「私たちも忙しいのですよ、もっと早く予定の日時を知らせてほしい。」と苦情を言われた
- ・学校側に対するの苦情などは仲介役として聞き役につとめスッキリしてもらおう。内容によっては学校へ伝えていないこともある。大丈夫だったら伝えるようにしている。

問6 コーディネーターに必要な知識・技能はなんだと思いますか？(複数回答)



その他 自らも率先してボランティア活動ができる技能、体力、意欲などを有すること

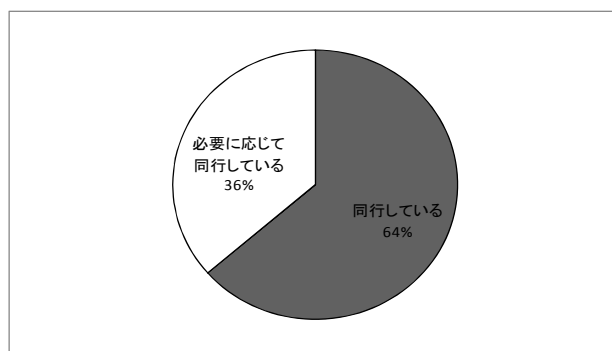
問7 派遣時にボランティアに必ず伝えていることはありますか？

- ・活動内容、日時場所
- ・感謝のことば
- ・ボランティアの意義
- ・学校からの要望
- ・活動中に事故が起こった場合の保険のこと
- ・活動を通じて知りえた情報の守秘義務
- ・無償ボランティアであるということ

問8 派遣時に学校に必ず伝えていることはありますか？(ボランティアの事前情報・活動歴など)

- ・ボランティアの個人情報(氏名、出身地、人柄、特技、活動歴)
- ・ボランティア団体情報(成り立ち、構成メンバー、活動状況)
- ・ボランティアに対する挨拶
- ・ボランティアの方への感謝の気持ちを伝えること

問9 派遣の際にボランティアに同行していますか？



問10 派遣後に学校及びボランティアへ感想の聞き取り等を行っていますか？

●学校へ

- ・活動状況などの聞き取りを行っている
- ・ボランティアからの要望意見を伝えている
- ・ボランティアからの感想を報告している(アンケートなども利用)
- ・ボランティアに対して礼状のお願いをしている

●ボランティアへ

- ・感想良かった点、悪かった点などの聞き取りを行っている
- ・今後の協力をお願い
- ・月に1回の会合で、アンケートなどにも答えてもらう
- ・慰労の言葉など学校の対応状況
- ・子どもたちの声、先生方の声など伝えている(十分に出来ていない)
- ・現在は行っていない。今後、行いたいと考えている

問 11 ボランティアに参加した方の声を教えてください。

- ・児童、生徒、教師との交流したことの喜びの声。交流できてよかった等
- ・「いいことをやっている、応援するよ」と励ましの言葉をいただいた
- ・久しぶりに学校に来られて、元気な子ども達の声聞き、元気をもらった気がした
- ・中学生とは怖いイメージがあったが、話してみると大変素直で好感が持てた
- ・学校のために、役に立てたことへの満足感や次回の参加意欲の向上
- ・子どもたちが未来に夢をもって、この町に生まれてよかったと言ってもらうために、私たち大人はどうしたらいいか。その事を1人1人の住民が考え、小さいことでも実行してみることが大切と思う。地域の子どもたちと触れ合うことから始めると、支援すべき事が見えてくるのではないか
- ・子どもたちが玄関まで見送ってくれた
- ・学校の行事に招待してくれて嬉しかった
- ・学校でいただいたお茶がおいしかった
- ・活動時間が短く、もっと長い時間活動したかった
- ・ボランティアまかせでなく、校長や係りの職員が姿を出してほしい

問 12 ボランティアの活動内容について学校に対する提案がありますか？

- ・児童だけでなく教師共々活動したい願望がある
- ・学校の要望に沿って活動するようにしている。“出すすぎず、引きすぎず”を心がけている
- ・地域の特徴を活かした学習
- ・現在のところ、環境整備、本の読み聞かせ、登下校時の安全見守り等がほとんどであるが、今後は学習支援（ゲストティーチャー）も取り入れてみたらどうか
- ・来年度に向け検討中
- ・学校が求める活動に対して対応するので別がない

問 13 コーディネーターをやっていて良かったことはありますか？

- ・児童から若さ、エネルギーをもらっている
- ・学校側からの感謝の意を伝えられたこと
- ・少しでも地域がまとまったなと感じたこと
- ・今までの経験と友人・知人・地域の人との繋がりが生かせ、母校のためになっていると思うとやりがいを感じる
- ・子どもたち、先生方、ボランティアの方が喜んでいて感じた時
- ・ボランティアの方から、次の方へと、学校支援の輪が広がっているのを感じた時
- ・学校の先生や地域の方々と触れあえること、知りあえること
- ・地域の行事に参加するようになった
- ・教育基本法、学校教育法、学習指導要領等、改正・改訂された教育法規などにも、この際目を通す機会ができ、我が国の教育の流れ方向性を知ることができた
- ・学校の事や地域の事がよく見えるようになった

問 14 コーディネーターをやっていて不安や悩み等がありますか？

- ・子どもたちが喜んでいるのかなという不安
- ・校長の異動により昨年の延長・積み上げ的なことができなかった
- ・地域とボランティアの人に本当にコーディネーターの仕事を理解してもらっているのか？もっと良いやり方はないのかと悩むことがある
- ・他の仕事と重なったりして、多忙になり過ぎてしまっている
- ・ボランティアへの接し方（ボランティアがコーディネーターよりも年上の場合）
- ・地域へ出向き、地域の情報を集めること
- ・コーディネーター配置事業が終了した後の姿。果して3年でこの事業が定着するのだろうか不安
- ・学校の要望にそえなかったこと
- ・一人で手さぐり状態なので、横のつながりが欲しい。できれば同じ町内にもう1人

問 15 公民館との関わりがありますか？また、それはどのような内容ですか？

- 関わりがある
 - ・逐一公民館と話し合い協働作業を行っている。学校と地域のイベント等を公民館中心に実践を拡充・改善している
 - ・現在は方向性や対応策など相談が主である
 - ・各組織の会議の日時の連絡、コーディネーターに対する助言、支援を受ける
 - ・公民館を拠点として活動している。公民館活動で子ども達に関わりのある行事にはなるべく参加したいと思っている
 - ・人材情報の提供を受けたい時や道具を借りたい時
- 関わりがない
 - ・一度、地域行事の収集のために行ったが、公民館が詳しく把握していない、と言われ以後行っていない
 - ・特に関わりはないが、公民館の役割、活動などどんなことをするのか把握したい

Ⅶ 佐賀県地域連携コーディネーターへのアンケート調査結果の考察

調査の結果をまとめると、以下の4点があきらかになった。

1 コーディネーターの資質能力について

コーディネーターの経歴は様々であるが、コーディネーターの多くが、これまでの学校や地域での活動、ボランティアの経験などがコーディネーターの活動にいかされている。

コーディネーターに必要な知識、技能については、「学校と地域の現状を理解していること」と「教員や活動仲間とのコミュニケーションがとれること」にコーディネーター全員が必要と感じている。

2 コーディネーターの活動について

学校支援への取組みも、地域の現状に合わせた活動が展開されている。

コーディネーターの活動拠点は、学校、公民館、市町教育委員会（社会教育課または学校教育課）など地域により異なっている。

学校支援ボランティアの募集は、公民館や学校での公募、地域の各種団体の会合などでの呼びかけ、地域の方への声かけといった方法でボランティアの人材を集められている。

学校との調整やボランティアの派遣については、学校、ボランティアの要望に応えたいという思いで活動されている。しかし、学校とボランティアの日程調整や学校の要望に見合うボランティアの発掘が難しいようである。

3 ボランティアに参加した人の評価について

学校でボランティアをすることによって、「児童、生徒、教師と交流できて大変嬉しかった」ということ、「自分が役に立てた」こと、そういうことがボランティア活動を継続するエネルギーとなっている。「また学校で、ボランティアをしたい」と思われている方も多いようだ。

ボランティアに参加してよかったという声が多い中、もっと学校側の職員も姿を出してほしいという教師の協力不足を指摘する声もでてくる。

4 コーディネーターとしての評価について

「コーディネーターという仕事が周囲に理解が得られているのか」という悩みや、「学校やボランティアの方の要望に応えられない状況がある」など、多くの課題を個々に持たれているという声があがっていた。しかし、今年度の成果発表会や出前講座でコーディネーターの方に接し、学校、地域とのつながりが徐々に構築されている気運を感じた。これは、各コーディネーターの方が試行錯誤の中、日々活動を重ねられ、時には自らがボランティアとして参加したり、各種研修の受講など、個人の努力に支えられた部分も大きい。「学校や地域の事がよく見えるようになった」「地域行事に参加するようになった」「地域がまとまったと感じた」など、活動を通じて学校支援への一番の理解者として変容されている姿も感じとれた。

佐賀県学校地域連携コーディネーターへの
アンケート調査票

学校における 地域人材の活用に関する調査へのご協力のお願い

平成21年9月9日

学校地域連携コーディネーター 各位

佐賀県立生涯学習センター（アバンセ）

館長 大草 秀幸

佐賀県立生涯学習センター（アバンセ）では、平成7年3月の開館以来、県内の生涯学習の振興に資するため、さまざまな事業を展開しております。このアンケートは、生涯学習調査データ研究事業の一環として行うものです。

さて、教育基本法の改正により第13条に「学校、家庭及び地域住民等の相互の連携協力」が盛り込まれ、学校教育において家庭及び地域住民と連携を図ることが大きな課題の一つとなっています。本調査は、学校での教科・特別活動・その他の学校運営に関する活動に対し、地域住民などからの支援の実態と学校教育における効果を明らかにし、今後の連携協力を図るための基礎資料とするものです。

ご回答は、全て統計的に処理いたしますので、ご回答いただいた記入者の方が特定できるようなかたちでは公表致しません。大変お忙しい中、お手を煩わせますが、本調査の趣旨をご理解の上、ご協力いただきますようお願いいたします。

※本調査でいう「ボランティア」とは、学校や学校教育活動を場として、学校を支援するボランティア活動、または、そのような場でボランティア活動を行う人を指します。なお、ここでいうボランティアには、行政が予算や人材を配当して、学校図書館や理科室の整備等を行う支援ボランティア（支援員）は含めないこととします。

◇アンケート調査票記入にあたって◇

- 1 回答は、調査票のかつこ内に具体的内容をご記入ください。選択肢がある場合は記号に○をつけてください。
- 2 調査票にご記入いただきましたら、10月13日（火）県主催の第2回コーディネーター研修講座にご持参ください。
- 3 この調査につきまして、ご質問などがございましたら下記までお問合せください。

【問い合わせ先】 佐賀県立生涯学習センター（アバンセ）担当：角(すみ)
住 所：佐賀市天神三丁目2-11
電 話：0952-26-0011
F A X：0952-25-5591

学校における地域人材の活用に関するアンケート(コーディネーター用)

問1 あなた自身についておたずねします。選択肢がある個所は記号に○をつけてください。

- 1 市町名 ()
- 2 性別 ア 女性 イ 男性
- 3 現職または前職 ()
- 4 既得免許・資格で、あなたがコーディネートをする際に役立っていると思われる免許や資格がありましたらお書きください。

[]

- 5 コーディネーターの活動拠点はどこですか？
(コーディネーターの仕事をする時どこに出勤されますか？)

ア 学校 イ 公民館 ウ 市町教育委員会
エ その他 ()

問2 どのようにしてボランティアを募集していますか？

[]

問3 学校との打ち合わせの回数と内容を教えてください。

年に何回 () 回

打合せ内容：

[]

問4 学校との調整やボランティアの派遣で難しいと感じることはありますか？

[]

問5 ボランティアから相談や苦情を受けたことがありますか？また、その内容はどのようなことでしたか？

[]

問6 コーディネーターに必要な知識・技能はなんだと思いますか？(複数回答可)

- 1 学校と地域の現状を理解していること
- 2 ボランティアの意義
- 3 人権を守る意識
- 4 活動を通じて知りえた秘密を守ること
- 5 児童・生徒たちとの接し方
- 6 教員や活動仲間とのコミュニケーションがとれること
- 7 パソコン操作
- 8 公文書等の作成
- 9 その他 ()

問7 派遣時にボランティアに必ず伝えていることはありますか？

()

問8 派遣時に学校に必ず伝えていることはありますか？(ボランティアの事前情報・活動歴など)

()

問9 派遣の際にボランティアに同行していますか？

- 1 している 2 していない 3 必要に応じて同行

問10 派遣後に学校及びボランティアへ感想の聞き取り等を行っていますか？

(・学校へ)

(・ボランティアへ)

問11 ボランティアに参加した方の声を教えてください。

()

問12 ボランティアの活動内容について学校に対する提案がありますか？(こんなボランティアはどうですか？)

()

問13 コーディネーターをやっていて良かったことはありますか？

()

問14 コーディネーターをやっていて不安や悩み等がありますか？

()

問15 公民館との関わりがありますか？また、それはどのような内容ですか？

(内容 :)

事業モデルの開発

平成21年度学校支援ボランティア・コーディネーター養成講座

Ⅷ 事業モデルの開発

平成21年度学校支援ボランティア・コーディネーター養成講座

1 はじめに

この生涯学習基礎データ調査研究事業において、地域人材の育成と活動促進に関する調査研究のテーマに「学校支援ボランティア活動」が取り上げられた。アンケート調査より佐賀県内の小中学校における学校支援への取組みと、学校と地域のボランティアをつなぐ学校地域連携コーディネーター活動の状況を把握することとなった。

そこで、佐賀県の学校支援活動推進に係る課題を捉え、活動に関わる人材の育成を目指した研修プログラムを調査研究委員会で企画立案し、平成21年度佐賀県立生涯学習センター事業「学校支援ボランティア・コーディネーター養成講座」で開催した。

そして、佐賀県の学校支援活動推進を目指し、各関係機関へ事業モデルとして開発したプログラム内容および実施報告について報告する。

2 学校支援に係る地域人材活用の実態と課題

(1) 佐賀県内の小中学校での地域人材活用の実態

アンケート調査から、佐賀県内のほとんどの小中学校で地域からのボランティアを受入れていることがわかった。(小学校96%、中学校76%が受入れている)

そして、このような地域からの支援は「児童生徒の学習効果につながる」など、子どもへの影響に良いと感じている。また、地域との交流も深まり、地域の方に学校への関心をもってもらえるなどのメリットも感じている。

今後もボランティアを実施していきたいという要望も高く、地域からの支援をほとんどの学校が「必要」と感じていることがわかった。(小学校97%、中学校92%が地域からの支援の必要性を感じている)

しかし、地域からの支援を必要と感じながらも、受入れる学校側の体制が十分に整備されていない点も以下のとおり提示された。また、「打合せに要する時間の確保が困難」「ボランティアを探す手間がかかる」「ボランティアからの要望に対応するための時間がとられる」など、地域からの支援を受けるには「時間と手間がかかる」という状況が学校側にあるようだ。

- ① 学校側のボランティア受入担当が校務分掌として明確に位置づけられていない。
(小学校71%、中学校75%が校務分掌に無い)
- ② 学校独自のボランティア人材バンクを保有している割合が低い。
(小学校59%、中学校89%が人材バンクを持っていない)
- ③ ほとんどの学校で教員対象の学校支援ボランティア研修を実施していない。
(小中学校ともに97%が実施していない)
- ④ ほとんどの学校でボランティアを対象とした事前研修を実施していない。
(小学校93%、中学校90%が実施していない)

(2) 学校地域連携コーディネーターのアンケートから

佐賀県学校地域連携コーディネーター配置事業におけるモデル地区11人のコーディネーターは、退職教職員や学校、地域でのボランティア活動など経験された方で構成されている。学校と地域の現状を理解している人達であるが、「コーディネーターの仕事が地域、ボランティアの方に理解されているのか」「学校、子ども、ボランティアの方の要望に応えられているのか」という思いや悩みを持たれている。

コーディネーターは、地域による学校支援体制作りの核となる存在として位置づけられている。今後の学校支援活動推進に向け、コーディネーターをサポートする配慮も大切ではないだろうか。

(3) アンケート結果にみる学校支援活動推進への課題

- ①学校支援ボランティア活動の意義についての理解不足
- ②ボランティア実践者、地域人材育成研修の機会が少ない
- ③学校と地域をつなぐ「コーディネーター」機能が地域で整備されていない

3 学校支援ボランティア・コーディネーター養成講座の構成と内容

(1) 養成講座の構成

アンケート結果にみる学校支援活動推進への課題から、

- ①学校支援の普及啓発
- ②学校支援ボランティアの実践者養成

を2つの柱に、モデル事業「平成21年度学校支援ボランティア・コーディネーター養成講座」を企画した。

柱	ねらい	内容例
学校支援の普及啓発	<ul style="list-style-type: none"> ・学校支援の理解 ・学校支援が必要とされる社会的背景の理解 	(講義) なぜ学校支援が必要か ～社会教育の役割 社会教育関係職員に期待されること～
	<ul style="list-style-type: none"> ・学校支援実態の把握 ・現状からみる学校支援の課題把握 	(報告解説) 学校支援ボランティアの可能性 ～学校支援ボランティアに関するアンケート結果について～
	<ul style="list-style-type: none"> ・具体的実践事例による現状把握 ・コーディネーターの役割理解 	(成果発表) 県内の地域ボランティアによる学校支援の実際
学校支援ボランティアの実践者養成	<ul style="list-style-type: none"> ・連携・協力の必要性(意義)を理解 ・コーディネーターの機能把握 	(事例紹介) 地域に根ざしたキャリア教育の舞台裏 ～民間コーディネーター 学校・地域・企業をつなぐ～
	<ul style="list-style-type: none"> ・学校、児童の現状理解 ・コミュニケーション力を高める 	(講義演習) 学校支援の要望をつかむコツ ～対話の中から見えてくる活動～

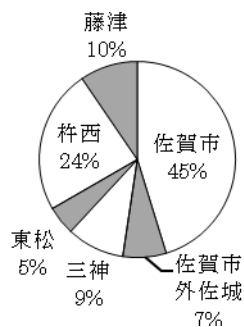
(2) 平成21年度学校支援ボランティア・コーディネーター養成講座の内容

<学校支援の普及啓発>

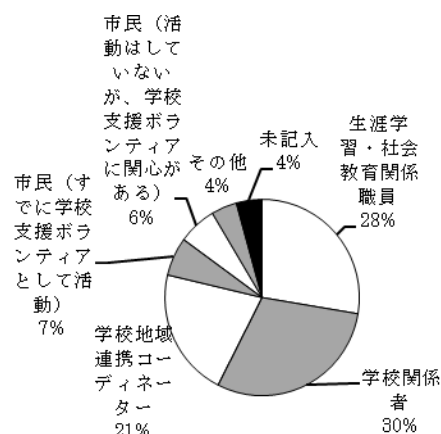
佐賀県全域を対象とし、佐賀県立生涯学習センター（アバンセ）を会場に講座を開催した。学校支援に携わる、生涯学習・社会教育関係職員、学校関係者、地域のボランティア実践者への参加を呼びかけた。なお、佐賀県立生涯学習センター事業「生涯学習関係職員実践講座」との合同開催とし、社会教育の側面から捉える学校支援について参加者全員で共有する場を設けた。また、佐賀県教育委員会で実施している「佐賀県学校地域連携コーディネーター配置事業」のモデル地区での成果報告会を取入れ、具体的事例から学校支援への取組みの参考を得る機会を提供した。

平成22年2月12日（金） 10:00～16:30 （アバンセ第1研修室）

（参加者） 63人



(地域別内訳)



(対象内訳)

- ・ 講義 「なぜ学校支援が必要か？」
 ～社会教育の役割 社会教育関係職員に期待されること～
 (講師) 佐賀大学文化教育学部長 上野 景三 氏

■ 講座では、学校支援の必要性、学校支援に社会教育関係職員がどういう役割を果たしていけばいいのかを話された。これまでの学校教育と社会教育の時代背景、学社連携、学校五日制等の事例をとりあげながら、学校教育と社会教育の相互の情報共有や相互理解があまりされていない現状があることを述べられた。そして、今の学校、家庭、地域での子どもの現状を踏まえ、これまでで



学校や家庭でやっていた子どもたちへの教育ができなくなっている現状がある今、それらを学校と協議しながら地域全体で支援していくことの重要性を提起された。(41ページ資料1参照)

100212

なぜ学校支援が必要か?

—社会教育の役割 社会教育関係職員に期待されること—

佐賀大学 上野 景三

○社会教育関係職員からの素朴な疑問

- ・なぜ、学校支援なのか
- ・歴史は、繰り返す（賃金時短、学社連携、五日制の受け皿、学社融合）
- ・学校の敷居（総合学習、資源動員、学力向上シフト）
⇒ 実は、相互の情報共有や相互理解はどこまで進んでいるのか

○失われつつある風景

- （・参考資料 2008 年度「はじめに」）
- ・食間の薬
- ・鉛筆削り
- ・学校五日制によってやめたもの
- ・児童センターの「コマ
- ・公民館でなければ、しなくなってしまったこと

○学校支援が問題提起する根本的な問題

- ・業務分担ではない（2009 年度報告 「子どもの『生きる力』の育成を土台にすえて」）
- ・子どもの実態の把握からの能力、学力（基礎、活用力）形成
（参考「遊び場の喪失」上野他編著『子どもの生活体験学習をデザインする』光生館
西日本新聞「学力格差」）
- ・地域社会の子ども、学校に対する関心の向上（「教育意義 社会で共有を」「塀の街」）
- ・地域社会の教育力の再形成
- ・子どもを真中においた教育的役割の再分配

○学校五日制時代における地域全体の教育力の見取り図の作成と担い手形成を

- ・五日制時代の時間
- ・五日制時代の空間（参考「子どもの劣化」）
- ・「格差社会」の時代を生きる子どものために
（参考 学力格差、健康格差、学校外活動費格差、家庭・基本的生活体験格差）
- ・社会教育関係施設・職員ができることは
（参考 「広がる多世代交流の場」）

・ 報告解説 「学校支援ボランティアの可能性」

～学校支援ボランティアに関するアンケート結果について～

(講師) 西九州大学短期大学部 講師 永田 誠 氏

(報告) 佐賀県立生涯学習センター 企画員 角 亮子

■佐賀県内の小中学校を対象に実施した「学校における地域人材の活用に関するアンケート」の結果報告では、得られた回答から特徴的な項目を取り上げた。特に、ボランティアの受け入れ状況、支援活動の成果や継続の必要性について、結果をグラフで示しながら学校支援の取り組みの実態を紹介した。(報告内容の詳細については、本報告書 6～26 ページ参照)



～アンケート調査の結果報告の様子～

■アンケート調査の結果から見出せる学校支援の課題と今後の展望について、西九州大学短期大学部講師の永田誠さんに解説していただいた。「学校における地域人材の活用に関するアンケート」調査を実施した成果として、佐賀県における学校支援の実態を数値化できたこと、教育現場で感覚レベルとしてあった学校支援における課題点が把握できたことを挙げられ、学校側のボランティア受け入れ体制が未整備の部分が大きいということを指摘された(次ページ図 1-3 参照)。

学校支援に関わるボランティアの存在意義は、子どもを中心とした円のつながり(次ページ図 1-6 参照)ができ、ボランティアが増えることで、学校教育のスリム化、教員の専門性の発揮といったことにつながることはないかと述べられた。そのために必要なことは、学校と地域間の情報の共有と信頼関係の形成であり、地域のシンボルともいえる学校を地域の方々の居場所とし、そこで子どもの成長に関わっていくことが求められているのではと提起された。



～学校支援の課題と今後の展望について～

【図1-1】

地域における「学校支援」の意義

◆教育基本法第13条
家庭、学校、地域の連携・協力を強化し、社会全体の教育力を向上させる

●教育振興基本計画
家庭、地域の連携・協力を強化し、社会全体の教育力を向上することが謳われる
⇒「地域ぐるみで学校を支援し、子どもたちを育む活動の推進」
「学校支援地域本部事業」

【図1-2】

「学校支援」のねらいと背景

- 飽和状態にある学校教育のスリム化
⇒教員の教育者としての専門性の発揮
- 地域における子どもの育成・学校教育への関心の高まり
⇒地域・家庭と学校との信頼関係の再構築
- 現代における地域教育計画の構築
⇒「我が子」から「地域の子ども」へ
「親が育てる」から「皆で育てる」へ

【図1-3】

調査における成果

- ① 佐賀県における学校支援の実態把握
- ② 学校におけるボランティア活用の広がり
- 学校での子どもと地域住民の出会いは格段に増加
- ③ 受け入れ、支援体制の未整備
- 学校の窓口、相互の情報を共有する機会は未整備のまま
- ④ 子どもの教育に対する成果及び継続の必要性は共有

【図1-4】

学校支援の充実に向けて

原点に戻って学校支援を考えてみると・・・

- ▶ボランティアは、誰のため？
- ▶教員の負担軽減は、本当に可能？
- ▶地域と学校をつなぐのは、どんな人？
- ▶学校と地域の連携で、子どもへの教育は本当に充実するの？

【図1-5】

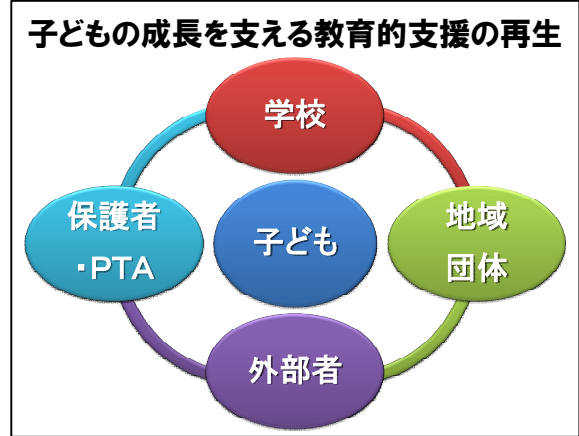
学校支援の取り組みは、まだ始まったばかり
予算措置や地域・学校間の認識差など問題は山積

現代における断絶しがちな
「関わり」「信頼」をつなぎなおす

地域みんなで、地域の子どもの成長を
「見守る喜び」を共有

教育における地域住民参画・協働の実現
子どもの「生きる力」の育成

【図1-6】

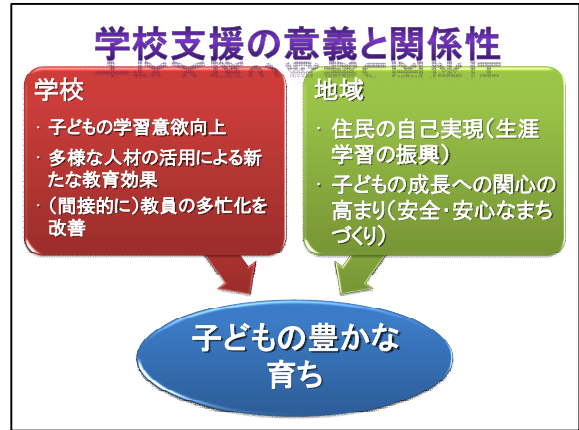


【図1-7】

“地域の学校”となるために

- 情報の共有・機会の創出による出会い
(例) 学校支援ボランティア、地域行事への参加
- お互いの状況・立場を理解し合う
(例) 課題解決に向けた話し合い、協働事業
- 立場を超えた人間的信頼関係の構築
(例) 「あの先生の頼みなら・・・」
「あのボランティアさんなら大丈夫！」
- 子どもを核とした地域コミュニティの創出
《子縁によるつながり形成》
=拠点としての学校：“地域の学校”

【図1-8】



・成果発表 「県内の地域ボランティアによる学校支援の実際」

(発表者)	有田町学校地域連携コーディネーター	松永 将 氏
	有田町学校地域連携コーディネーター	池田 文次 氏
	太良町学校地域連携コーディネーター	川島 寿子 氏
	佐賀市立嘉瀬小学校長	宮崎 祐治 氏
(コーディネーター)	佐賀県教育庁社会教育・文化財課 社会教育主事	船木 幸博 氏

■有田町は有田地区と西有田地区の2地区で実施されており、特徴的な支援内容として、地場産業である焼き物の「窯元見学」支援、障がいのある児童がいる学級の水泳指導、文化発表会における茶道指導等を紹介された。年度初めに前もって学校からの支援要請を把握できていたことで、ボランティアの調整もスムーズにでき、事業自体が軌道にのったという感触を得られたということだった。今後の課題としては、事業発足以前からの既存のボランティアグループとの連携・協力体制作りであり、円滑な活動推進のために学校側の窓口の必要性を強調された。

■太良町の報告では、コーディネーターの方が支援活動の現場に常に同行し、お礼状やコーディネーター通信をボランティアに直接届けるといった、細かい配慮が見られ、参加者からも参考になったといった声が寄せられた。また、8月に教職員対象の研修会を実施したことで、教職員の意識の変化がみられ、それ以降のコーディネーターへの依頼が増えたことが報告された。また、学校支援の活動を実施する上で、教職員とボランティア、また、教職員とコーディネーターとの信頼関係が何よりも大事であり、活動の継続や幅の広がりにつながっていると述べられた。

■佐賀市は嘉瀬校区がモデル地区であり、学校側の立場からの発表ということで、嘉瀬小学校長より報告していただいた。嘉瀬校区は、学校支援地域本部の事務局を地区の公民館に設置しており、公民館を核とした支援体制が整備された先進的な地区でもある。学校長の経験から、学校支援活動を推進するには、学校側からだけの呼びかけでは限界があり、学校と地域をつなぐ機関（コーディネーター）が必要であると強調された。また、ボランティアの活動が入ることで、教職員の負担軽減につながっていると感じていると述べられた。参加者からも、学校と地域の連携の在り方として参考になったという声が聞かれた。



～「佐賀県学校地域連携コーディネーター配置事業」成果発表の様子～

＜学校支援ボランティアの実践者養成＞

「佐賀県学校地域連携コーディネーター配置事業」のモデル地域より、嬉野市および神埼市教育委員会の共催を得て、嬉野市、神埼市の2市で出前講座を開催した。

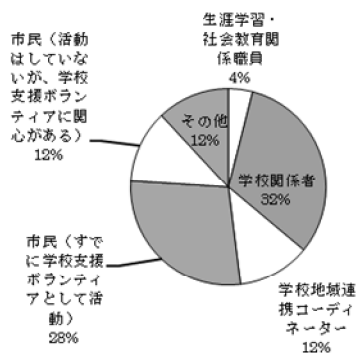
両市の学校支援の取組みには違いがあり、受講対象者にその特徴が表れた。嬉野市の学校支援は地域の団体（嬉野コミュニティサポートスタッフ）が中心となり、活動を推進されている。講座も嬉野コミュニティ教育支援協議会の会合に合わせ、地域運営学校の本部校である嬉野中学校で開催し、学校関係者と団体の長を中心に参加いただいた。神埼市の学校支援は市民による支援体制を構築されている。地域住民が支援ボランティアとして登録し、学校からの要請を受け活動を展開されている。講座には神埼市のコーディネーターの呼びかけで、市民ボランティアを中心とした参加があった。

このように受講対象者に違いはあったが、講座は同じプログラムで実施した。

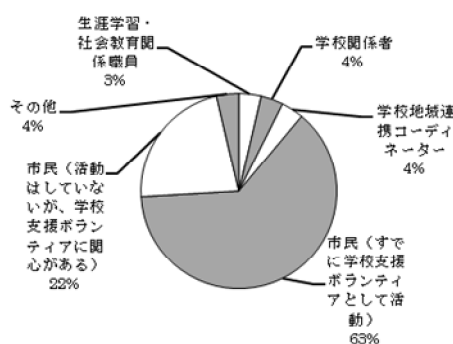
平成22年2月24日（木）14：00～16：00（会場：嬉野市立嬉野中学校）

平成22年2月26日（土）13：00～15：00（会場：神埼中央公園体育館）

（参加者） 嬉野市 30人、神埼市 32人



（嬉野市）



（神埼市）

・事例紹介「地域に根ざしたキャリア教育の舞台裏」

～民間コーディネーター 学校・地域・企業をつなぐ～

（講師） NPO法人鳳雛塾 事務局長 横尾 敏史 氏



～民間コーディネーターの活動について～

■佐賀市を中心に事業展開されているNPO法人鳳雛塾のキャリア教育は、「学校」「地域」「企業」のつながりとともに、下級生、上級生という子ども同士のつながり、教科のつながり、小学校から高校までのカリキュラムのつながりと、あらゆる「つながり」の中で実践されている。民間コーディネーターの視点から、学校と地域が上手く連携するため、両者をつなぐコーディネート機能の重要性についても述べられた。（図2～図8参照）

そして、これまでの活動を通じた問題や課題についても触れ、改善活動について語られた。一例として、多忙な先生方とコミュニケーションを図るための教材やヒアリングシートなど、活動ツールの作成を紹介いただきコーディネーター業務のヒントを得た。

(添付資料 54～57 ページ参照)

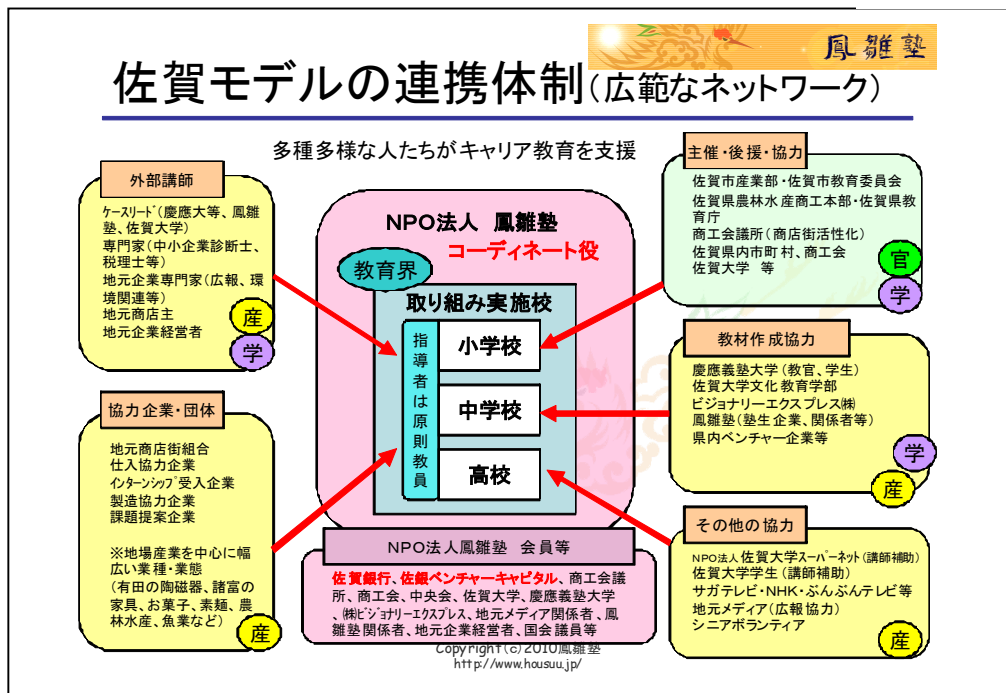
また、キャリア教育事業の成果を映像で紹介され、「学校・地域・企業」の連携協力の取組みの中で様々な体験を通し、成長していく子どもたちの姿を確認した。



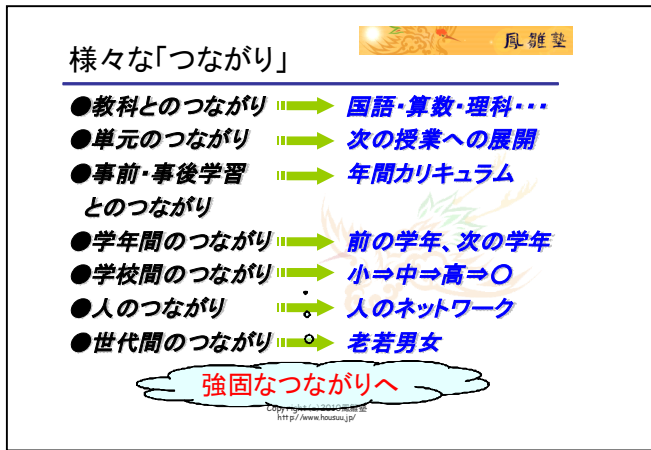
～講義の中での講師との意見交換～

～子どもたちの販売体験活動を映像で紹介～

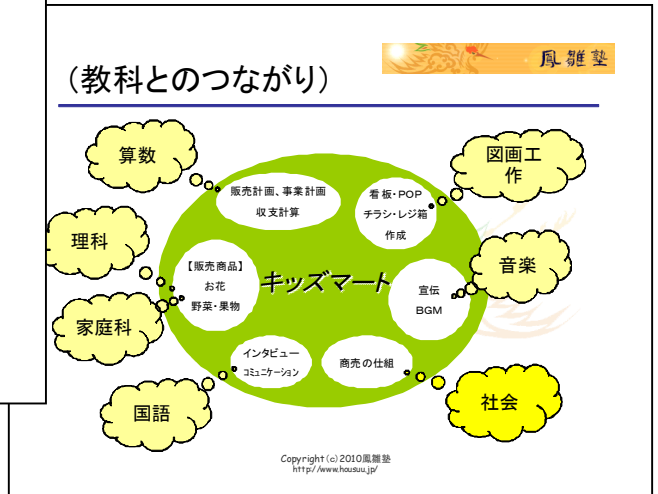
【図 2】



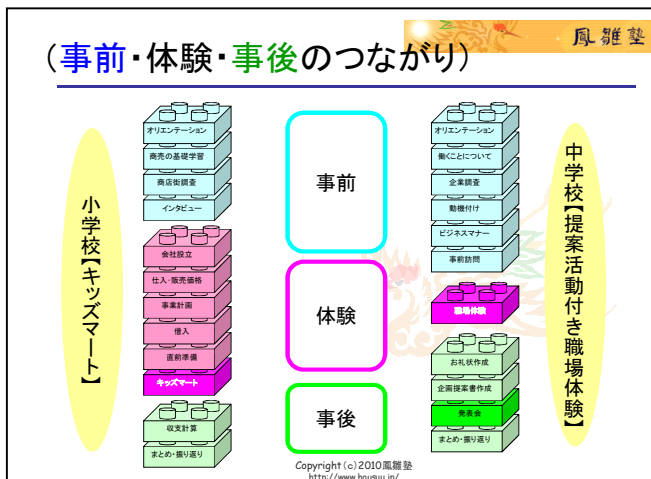
【図3】



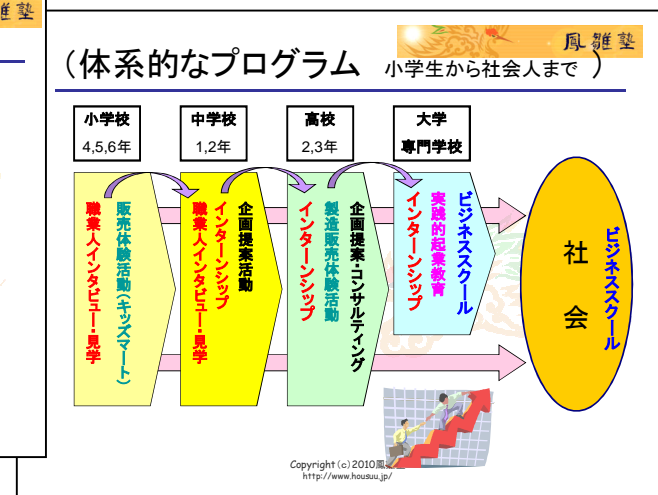
【図4】



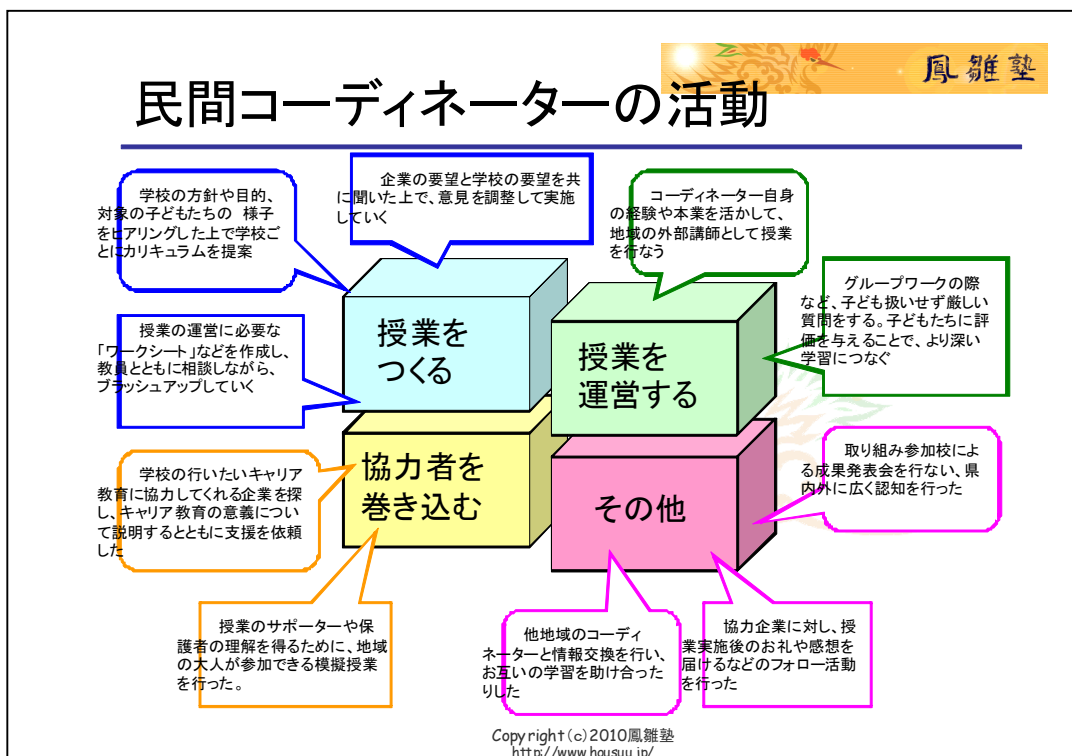
【図5】



【図6】



【図7】



- ・ 講義演習「学校支援の要望をつかむコツ」
 ～対話の中からみえてくる活動～
 (講師) NPO法人鳳雛塾
 事務局長 横尾 敏史 氏



～講義の様子 嬉野会場～

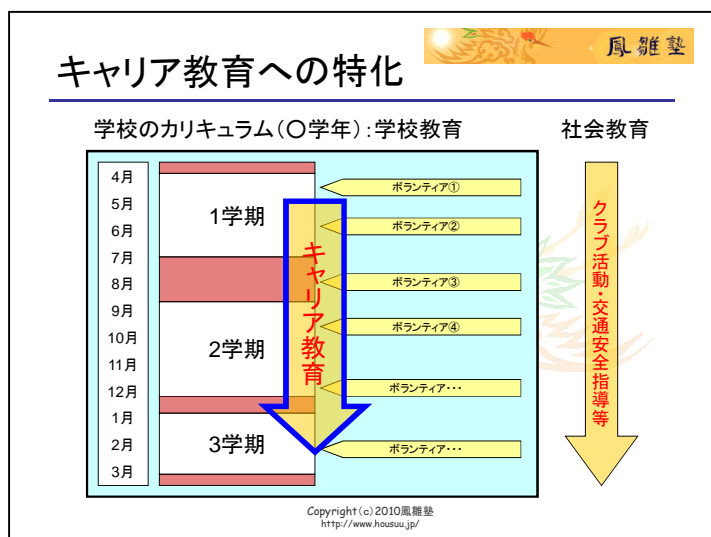
■各会場でワークシートとチェックリスト(添付資料 58～60 ページ参照)を用いた演習が取り入れられた。これまでの活動を振り返り、問題意識をもって行動する大切さを再確認する機会となった。

■嬉野市では今後の展開として、一団体と学校のつながりという水平方向の活動を、各団体ごとコラボレーションし垂直型のボランティア活動につなげることができないか提案された。

(図8のイメージ)

活動の拡がりをもたせることが、子どもたちの成長にもつながっていくのではないかと述べられた。

【図8】



～演習に取り組む参加者 神埼会場～

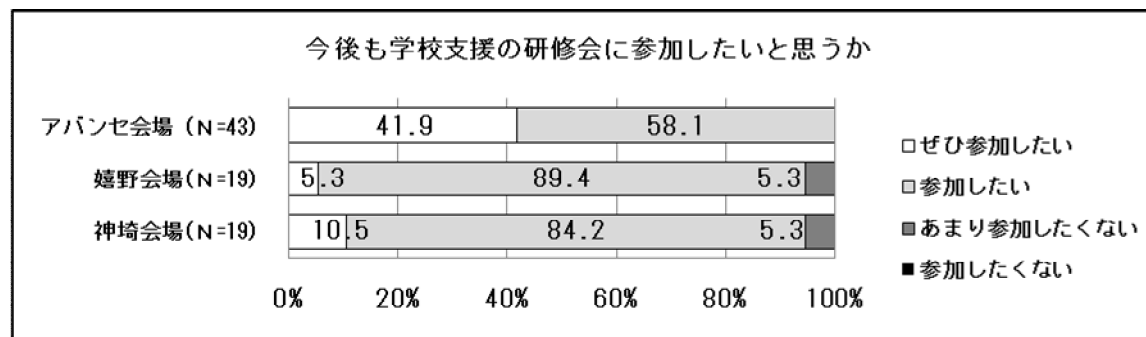
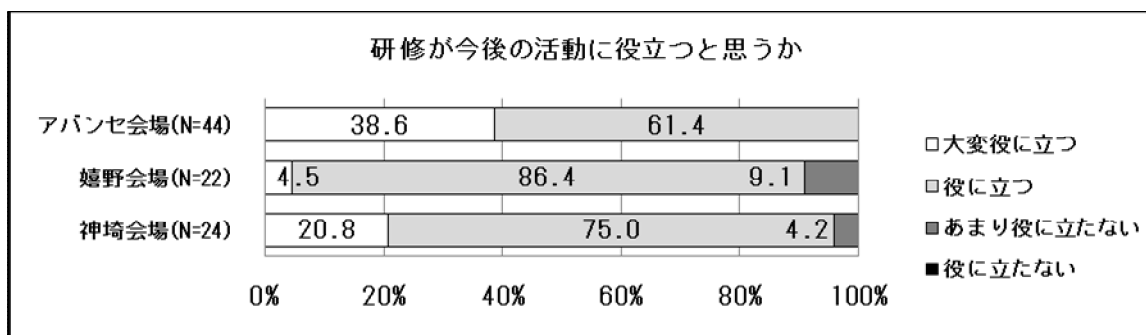
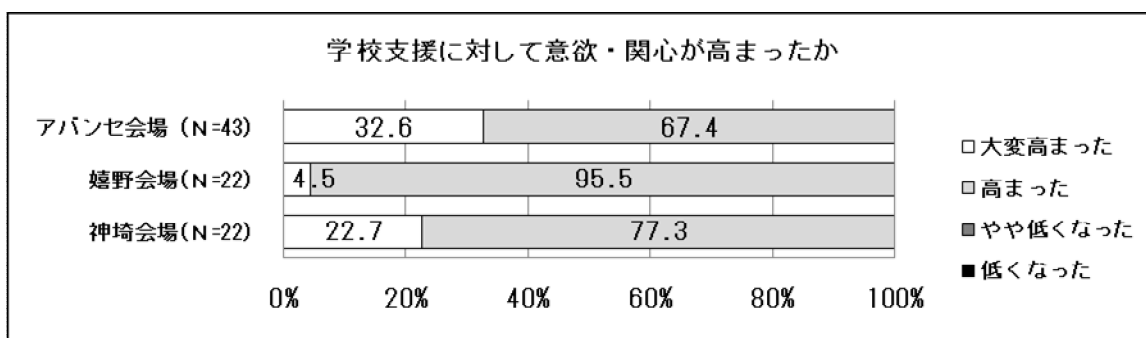
■神埼市では、ボランティアとして活動する地域住民自身の自己成長の大切さを呼びかけられた。活動をよりよいものに展開していくため、自分たちの活動を振り返る自己理解と、相手(学校、先生、児童達)のことを考える他者理解を踏まえた相互理解を心がけようとして述べられた。

○ 資料出所(図2～図8): NPO法人 鳳雛塾

4 事業モデルの評価（受講者へのアンケート結果から）

（1）講座全体への評価

- 講座は学校支援に対する意欲関心を高める機会となった。
- 講座内容は今後の活動に役立つという結果を得た。
- 受講者の今後の学校支援研修会への参加意向は高い。
- 学校支援の普及啓発を目的とした講座（アバンセ会場）での満足レベルが高かった。
- 学校支援ボランティア実践者養成を目的とした出前講座では、地域のボランティア実践者が受講者の大半を占めた神崎市での反応が、学校関係者を中心に受講された嬉野市よりやや高い傾向を示した。

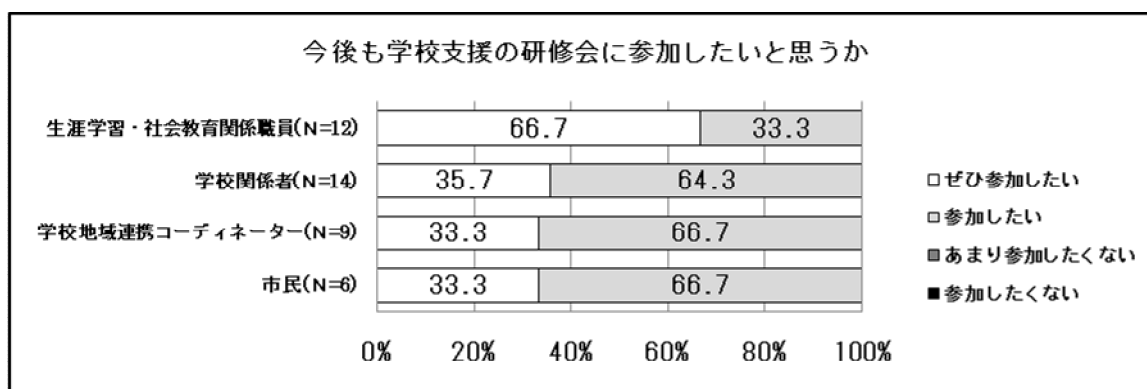
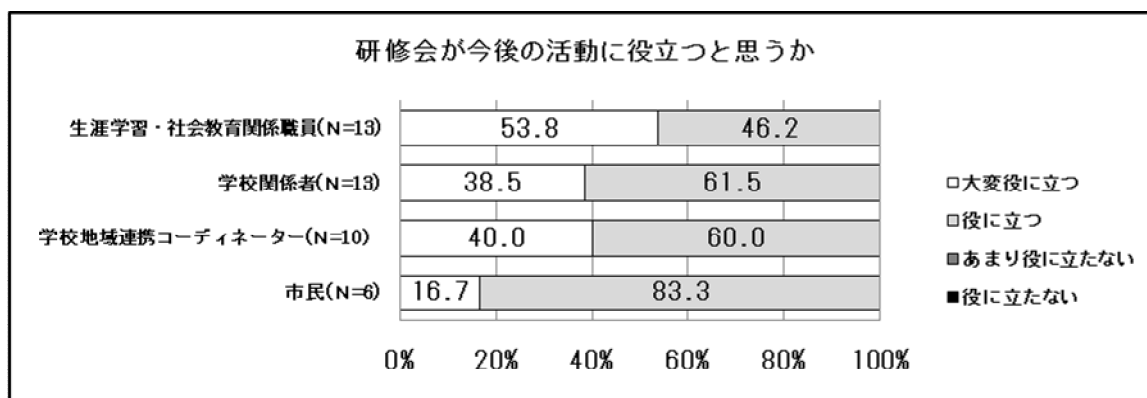
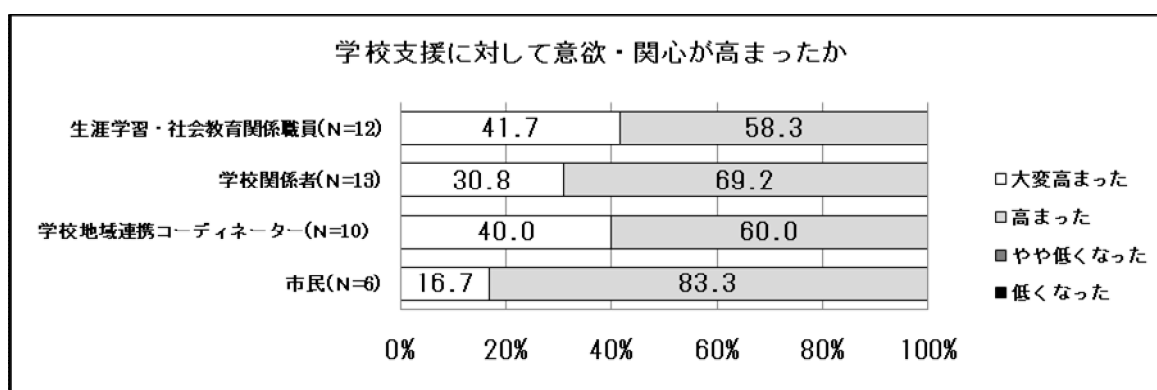


※アバンセ会場では学校支援の普及啓発を目的に、社会教育、学校教育、地域住民と、枠を超えた対象が一堂に会した。

そこで、アバンセ会場での講座全体評価をさらに対象毎の評価に分けてみる。

学校支援の普及啓発を目的とした今回の講座を参加対象グループに分けてみると、生涯学習・社会教育関係者グループからの反応が高かった。

地域全体で学校教育を支援するこの取組みは、地域のことを良く知る「公民館」の果たす役割に期待されることも大きい。そうした中、今回の講座で公民館職員を中心とした社会教育関係者に、学校支援への関心や今後の研修会への参加意欲を高める機会を提供できたことは、活動の推進にむけた一歩となったのではないだろうか。

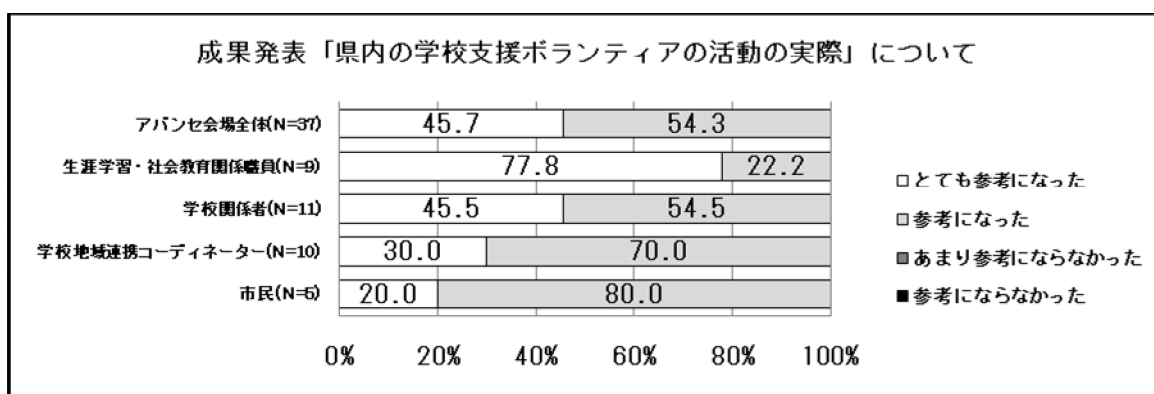
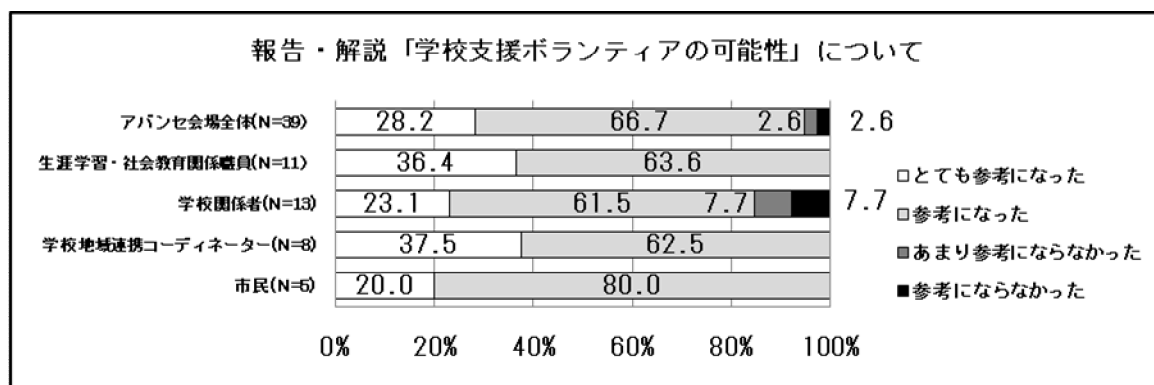
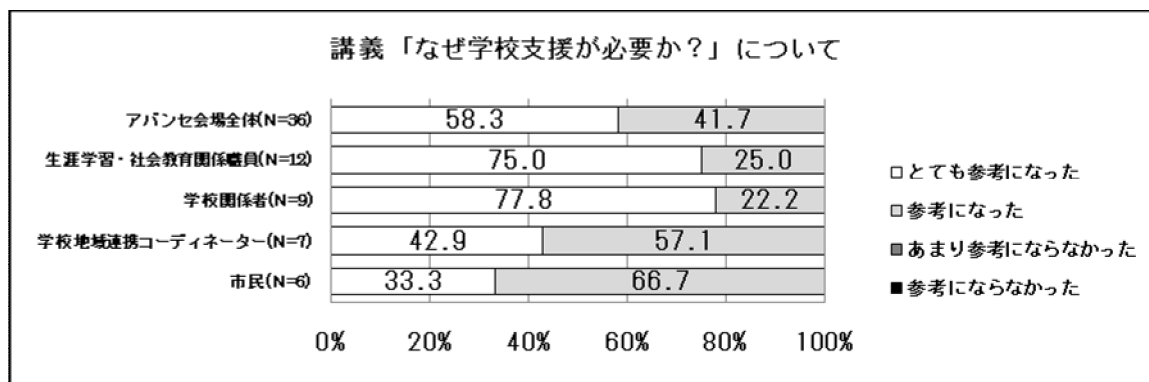


(2) 各講座への評価

～学校支援の普及啓発を目的とした講座（アバンセ会場）～

学校支援への理解、学校支援が必要とされる社会的背景の理解をねらいとした講義（「なぜ学校支援が必要か」）に対し、「とても参考になった」という満足度が高かった。

この傾向から、今後も学校支援を受入れる側の「学校」や、活動を支援推進する「行政や公民館等」、ボランティア活動のやり手側である「地域住民」に向けた、学校支援への認識を補う啓発活動の必要性がうかがえる。

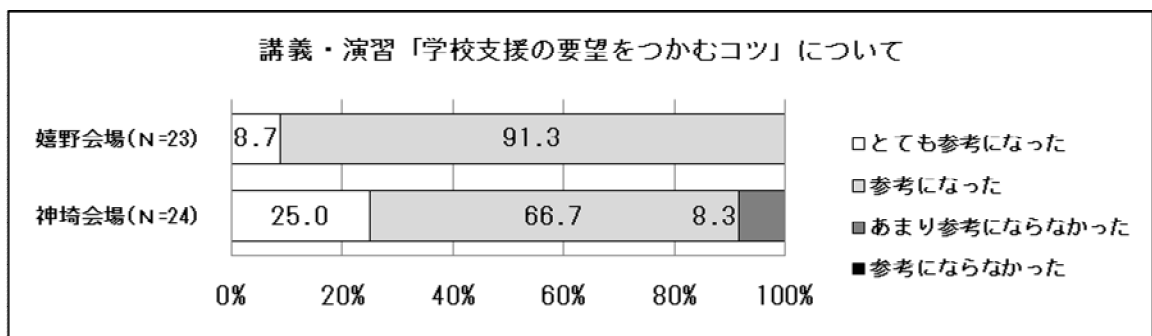
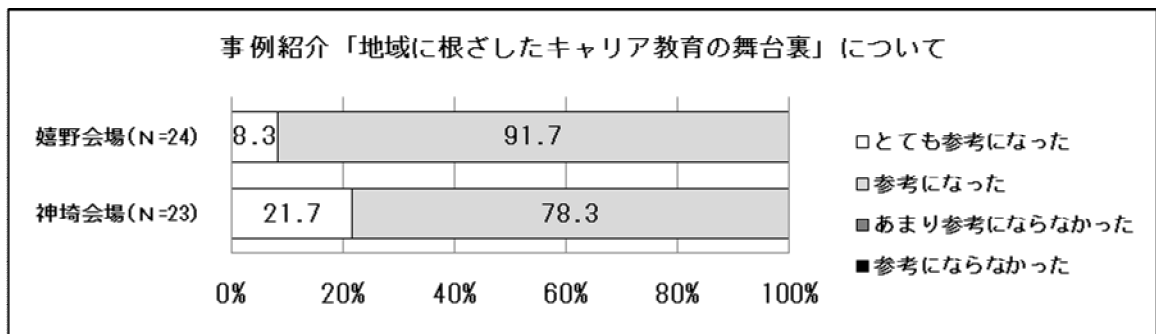


※各グラフの一番上にアバンセ会場の参加者全員の評価を表し、下には参加者のグループ別（4グループ）に得られた評価をグラフで表した

※各グラフのアバンセ会場全体数には、対象不明2名が含まれている

～学校支援ボランティア実践者養成を目的とした講座（出前講座）～

今回、同じプログラムを2地区で開催したが、地域のボランティア実践者が受講者の大半を占めた神崎市での満足度がやや高い傾向を示した。研修方法では講義を受けるだけでなく、自ら参加、発言できる演習形式も受入れる意向があるようだ。また、自分自身に置き換えて考えることのできるワークシートの活用、活動のヒントを得る映像や画像を使った事例紹介は、研修で関心を引き付ける手法として適していた。

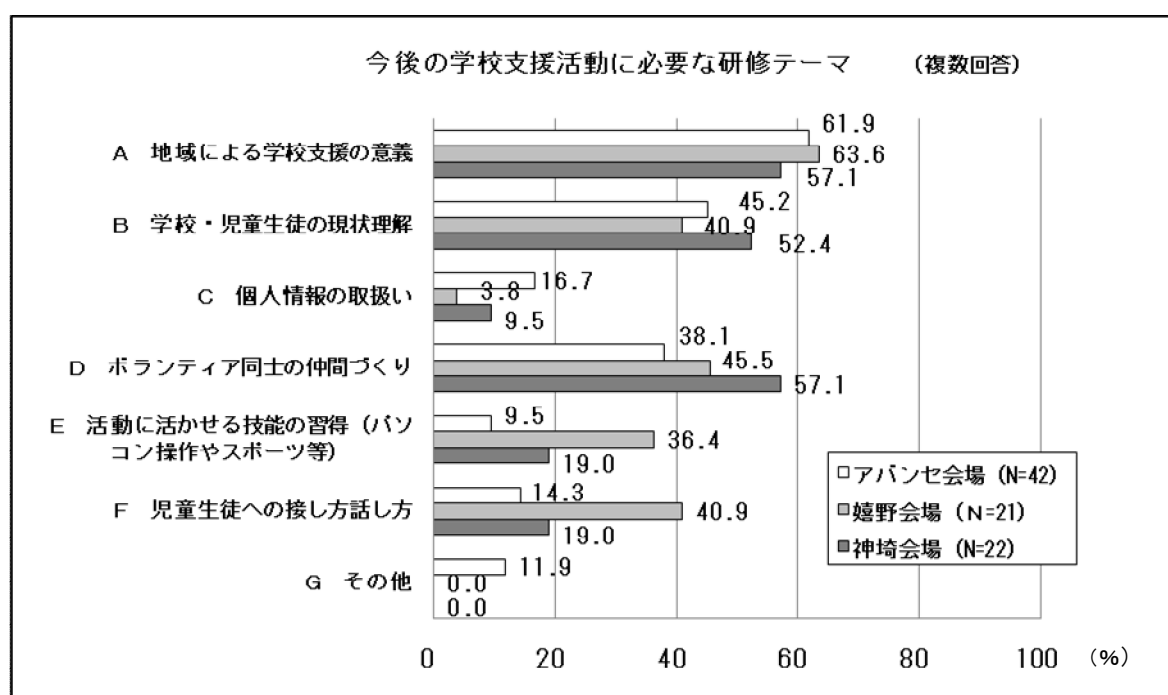


(3) 今後の学校支援活動に必要な研修テーマとは

- ①地域による学校支援の意義
- ②学校・児童への現状理解
- ③ボランティア同士の仲間づくり

以上の3つのテーマが上位に取上げられた。

上位3テーマについては全ての会場で必要な研修テーマとして捉えられていた。ボランティア実践者を対象とした嬉野市、神埼市の受講者からは「活動に活かせる技能の習得」「児童生徒への接し方話し方」という、支援のやり手側で実践に活かせる研修テーマへの要望も見受けられた。



5 おわりに

今回の学校支援ボランティア・コーディネーター養成講座から、地域での学校支援を促進するための施策として人材育成研修の必要性が高いことが示された。

まずは地域全体で子どもを育てるという共通認識を図る場の設定、「学校支援の総論」をおさえる必要があるだろう。これは、学校・家庭・地域すべての現場に共通していえることだと考える。そして、学校支援への取組みは地域によって様々であることから、ボランティアの実践者育成には地域の実情に応じた現場レベルでの研修の導入が不可欠といえる。

今回の学校における地域人材の活用に関するアンケート調査報告では、残念ながら県内の小中学校で教員対象のボランティア研修、ボランティア対象者への事前研修は実施されていないことが浮き彫りとなった。おそらく地域でも同様のことがいえるのではないだろうか。学校と地域の垣根を超えたつながりや関係性を構築していく過程において、学校支援に係る人材育成を目的とした研修を、地域の各現場で取組まれることが望まれる。

平成21年度学校支援ボランティア・コーディネーター養成講座
講座資料

【資料3】

平成〇〇年度 キャリア教育事業実施に係る協議事項等 (中学校用)

①協議させて頂きたい事項等

(順不同)

項目	今年度の計画
カリキュラムについて	
使用教材の検討について	
授業風景の写真・ビデオ撮影について	
先生方との打ち合わせ時間について	
先生方との情報交換手段について (メール、FAX、その他)	
大学生の関わりについて	
シニア(地域)ボランティアの活用について	
PTAや協議会との連携について	
その他	

【資料3】

②確認したい事項等

【職場体験（キャリア教育）に関する基本的な事項】

項目	例	今年度の計画
クラス数	5クラス	() クラス
生徒数	160人 2-1 2-2 2-3	() 人 1 () 人 (男 ・女) 2 () 人 (男 ・女) 3 () 人 (男 ・女)
先生のお名前 (フルネーム)	2-1 ○○先生 2-2 ○○先生 2-3 ○○先生 副担任 ○○先生 副担任 ○○先生	1 () 先生 2 () 先生 3 () 先生 副担任 () 先生 副担任 () 先生
総時間数 (予定)	約55時間 (課外授業も含む)	(約) 時間程度 学級活動 ()、特別活動 ()
実施期間 (予定)	5月24日から 12月末まで	スタート時期 (月 日頃)
総合学習の時間	火曜日の5,6時間	毎週 () 曜日、() 時間 毎週 () 曜日、() 時間
総合学習のテーマ (あれば教えてください)	進路学習の充実	
職場体験の開催 (予定) 日	11月○○日 (月) 11月○○日 (金)	
職場体験の (予定) 場所	昨年の受入資料参照	
学校等の行事について	運動会 修学旅行、遠足 地元との連携行事 地元のまつり 研究発表会 職員会議 その他	
その他		

外部講師、協力企業様 向け事前確認シート

【実施概要】

実施日時	平成 年 月 日 () 時 分～ 時 分
実施場所	
備 考	

【ご協力（ご講演）いただく対象学年の子どもたちについて】

項 目	内 容
学 校 名	() 学校
学年（年齢）	() 年 () 歳
ク ラ ス 数	() クラス
生 徒 数	() 人 (男 人・女 人)
先生 の 氏 名 (※学年主任)	1 () 先生 (男性・女性) 2 () 先生 (男性・女性) 3 () 先生 (男性・女性) () 先生 (男性・女性)
本 プ ロ グ ラ ム の 学 習 の テ ー マ (現在学んでいる学習内容)	
今 回 の 単 元 (講 演) の 位 置 づ け	
ご 指 導 い た だ き た い 内 容 ご 講 話 い た だ き た い 内 容	
学 校 か ら の 要 望 等	
備 考	

その他の事項

項 目	内 容
学校の特色 (学校目標)	
対象学年の特色	
対象学年の勉強内容 (特徴的な学習など)	
その他	

チェックリスト

※該当する項目の「□」にチェック(レ)をしてみよう



<事前準備について>

- ボランティアの前に先生と打合わせをしている(ボランティアの内容や方法、進め方など)
- ボランティアの前にコーディネーターと打合わせをしている(ボランティアの内容や方法、進め方など)
- ボランティアの前にしっかり事前準備(学習)をして対応している
- ボランティアをするための資料をたくさん作っている(または準備、整理している)
- ボランティアの対象となる学年(年齢)の子どもたちが通常学校でどのような勉強をしているかを知っている

<活動中のことについて>

- 自分や自分たちのことを子どもたちにきちんと説明している(自己紹介やなぜこの活動をしているかなど)
- 子どもたちにボランティアの目的や授業の目当てなどを伝えている(先生が対応される場合もOKです)
- ボランティアをする際、工夫を施した自前の道具などを活用している(子どもたちが理解しやすいための資料や道具など)
- ボランティアの対象となる学年ごとに教え方(ふれあいかたや話かた)を変えている
- ボランティア活動と教科の授業を組み合わせて考えて活動を行っている
- 子どもたちの「振り返り(授業などの最後にまとめたりする)の時間」を設けている(先生が対応されている場合もOKです)

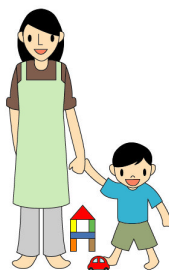
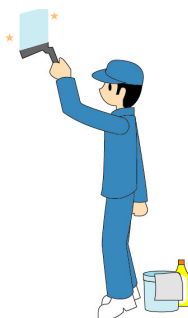
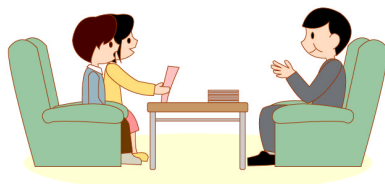
<ボランティア後のことについて>

- ボランティアの後、子どもたちのために役に立ったかどうか気になる
- ボランティアの後、子どもたちからどのように役に立ったかの説明や報告を受けている
- ボランティアの後もよく子どもたちとコミュニケーションをとっている



<全体的なこと>

- 自分たちの団体の中で、ボランティアの情報は全員に行き届いている(情報の共有化)
- 子どもたちに教えること(または子どもたちと関わること)は難しいと思う
- 積極的に子どもたちのボランティア活動に関わっていきたいと思っている
- 子どもたちと関わるボランティアのレパートリー(活動分野など)が2つ以上ある
- 他の分野のボランティア活動も行いたいと思っている
- 他のボランティア(団体)がどのような活動を行っているかを良く知っている(校区内)
- 他のボランティア(団体)の人たちと連携しながら活動してみたい
- もっともっと先生たちとコミュニケーションを図りたいと思っている
- もっともっと子どもたちとのふれあいを広げていきたいと思っている
- これからの学校にとって地域ボランティアは必要だと思う
- これからもボランティア活動を広げていきたいと思っている



学校支援ボランティア・相互理解のためのワークシート

1. 自分たちのことを振り返る(自己理解)

<p>【現在】</p> <p>① ボランティアの内容</p> <p>② ボランティアをする動機・心構え</p> <p>③ ボランティアをする時に必要なこと・もの</p> <p>④ ボランティアをする時に欠けていること・もの</p> <p>【将来】 将来の展望</p> <p>① ボランティアを通して子どもたちにとって欲しいのか (子どもたちの成長)</p> <p>② ボランティアを通して自分たちはどうなりたいのか (自己成長)</p> <p>③ 今後どのような活動をしていきたいのか</p>	<p>● 学校として欲しいこと</p> <p>-----</p> <p>● 他のボランティア団体と連携できること(したいこと)</p>
--	---

3. 相互理解のために

【お互いの理解のためにすべきこと】

- 自分たちがすべきこと

● 学校として欲しいこと

● 他のボランティア団体と連携できること(したいこと)

2. 相手のことを考える(他者理解)

<p>学校名: 【学校の現状】</p>	<p>【先生たちの現状】</p>	<p>【児童・生徒の現状】</p>
-------------------------	------------------	-------------------

※ 本来は学校へのヒアリングやホームページ等により、学校目標や教育方針などの現状を把握する

平成21年度学校支援ボランティア・コーディネーター養成講座
受講者へのアンケート

4. 「県内の学校支援ボランティア活動の実際」 成果発表について

A とても参考になった B 参考になった C あまり参考にならなかった D 参考にならなかった

※ 特に参考になった事例がありましたらお教えてください。

5. 講座全体について

- ① 本日の講座はあなたの今後の学校支援活動に役立つと思いますか
A 大変役に立つ B 役に立つ C あまり役に立たない D 役に立たない
- ② 学校支援に対して意欲・関心が高まりましたか
A 大変高まった B 高まった C やや低くなった D 低くなった
- ③ 本日の講座の時間はどうでしたか
A 長かった B 適切 C 短かった
- ④ 今後の学校支援の活動にどのようなテーマ、内容の研修が必要だと思いますか (複数回答可)
A 地域による学校支援の意義 B 学校・児童生徒の現状理解 C 個人情報の取扱い
D ボランティア同士の仲間づくり E 活動に活かせる技能の習得 (パソコン操作やスポーツ等)
F 児童生徒への接し方話し方 G その他 ()
- ⑤ 今後このような学校支援に関する研修会があればまた参加したいと思いますか
A ぜひ参加したい B 参加したい C あまり参加したくない D 参加したくない

※ 講座の感想や気づき、学校支援への意見などがありましたら、自由にお書きください。

ご協力ありがとうございました。講座終了後、アンケート回収箱にお入れください。
佐賀県立生涯学習センター (アバンセ)

4. 研修全体について

- ① 本日の研修はあなたの今後の学校支援の活動に役立つと思いますか
A 大変役に立つ B 役に立つ C あまり役に立たない D 役に立たない
- ② 学校支援に対して意欲・関心が高まりましたか
A 大変高まった B 高まった C やや低くなった D 低くなった
- ③ 本日の研修は講義だけでなく参加者自身が考え、活動する時間も設定しましたが、このような研修をどう思いますか
A とても良かった B 良かった C あまり良くなかった D 良くなかった
- ④ 本日の研修の時間はどうでしたか
A 長かった B 適切 C 短かった
- ⑤ 今後の学校支援の活動にどのようなテーマ、内容の研修が必要だと思いますか (複数回答可)
A 地域による学校支援の意義 B 学校・児童生徒の現状理解 C 個人情報取扱い
D ボランティア同士の仲間づくり E 活動に活かせる技能の習得 (パソコン操作やスポーツ等)
F 児童生徒への接し方話し方 G その他 ()
- ⑥ 今後このような学校支援に関する研修会があればまた参加したいと思いますか
A ぜひ参加したい B 参加したい C あまり参加したくない D 参加したくない

※ 研修の感想や気づき、学校支援への意見などがありましたら、自由にお書きください。

()

ご協力ありがとうございました。講座終了後、アンケート回収箱にお入れください。
佐賀県立生涯学習センター (アバンセ)

平成21年度 学校支援ボランティア・コーディネーター養成講座 アンケート結果

講座名「地域の力を学校へ～夢をつなぐ学校支援～」 平成22年2月12日（金）10:00～16:30

「なぜ学校支援が必要か？～社会教育の役割 社会教育関係職員に期待されること～」

講師 上野 景三さん（佐賀大学文化教育学部長）

「学校支援ボランティアの可能性」＜佐賀県立生涯学習センター「生涯学習基礎データ調査委員会」アンケート結果報告＞

「県内の学校支援ボランティア活動の実際」＜佐賀県教育委員会「学校地域連携コーディネーター配置事業」成果発表＞

参加人数 63名 ※アンケート回収 47名/63名（74.6%）

1. あなた自身について

①性別

	男性	女性	未記入	計
人数	29	16	2	47
%	61.7%	34.0%	4.3%	100.0%

②年齢

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代以上	未記入	計
人数	0	2	7	15	10	6	5	2	47
%	0.0%	4.3%	14.9%	31.9%	21.3%	12.8%	10.6%	4.3%	100.0%

③対象

	A生涯学習・社会教育関係職員	B学校関係者	C学校地域連携コーディネーター	D市民(すでに学校支援ボランティアとして活動)	E市民(活動はしていないが、学校支援ボランティアに関心がある)	Fその他	未記入	計
人数	13	14	10	3	3	2	2	47
%	27.7%	29.8%	21.3%	6.4%	6.4%	4.3%	4.3%	100.0%

④地域

	A佐賀市	B多久市	C小城市	D鳥栖市	E神埼市		
人数	19	1	2	0	3		
%	40.4%	2.1%	4.3%	0.0%	6.4%		
	F吉野ヶ里	G基山町	H上峰町	Iみやき町	J唐津市		
人数	0	0	0	1	1		
%	0.0%	0.0%	0.0%	2.1%	2.1%		
	K玄海町	L伊万里市	M武雄市	N有田町	O大町町		
人数	1	2	1	5	0		
%	2.1%	4.3%	2.1%	10.6%	0.0%		
	P江北町	Q白石町	R鹿島市	S嬉野市	T太良町	未記入	計
人数	1	1	1	2	1	5	47
%	2.1%	2.1%	2.1%	4.3%	2.1%	10.6%	100.0%

	人数	%
佐賀市	19	40.4%
佐賀市外佐城	3	6.4%
三神	4	8.5%
東松	2	4.3%
杵西	10	21.3%
藤津	4	8.5%
未記入	5	10.6%
計	47	100.0%

2. 「なぜ学校支援が必要か？」講義について

	とても参考になった	参考になった	あまり参考にならなかった	参考にならなかった	計
人数	21	15	0	0	36
%	58.3%	41.7%	0.0%	0.0%	100.0%

無回答 11

3. 「学校支援ボランティアの可能性」アンケート結果報告、解説について

	とても参考になった	参考になった	あまり参考にならなかった	参考にならなかった	計
人数	11	26	1	1	39
%	28.2%	66.7%	2.6%	2.6%	100.0%

無回答 5 ※午前だけの参加者3名退室のため、総数44

4. 「県内の学校支援ボランティア活動の実際」成果発表について

	とても参考になった	参考になった	あまり参考にならなかった	参考にならなかった	計
人数	16	21	0	0	37
%	43.2%	56.8%	0.0%	0.0%	100.0%

無回答 4 ※成果発表前に3名退室のため、総数41

※参考になった事例について【自由記述】

- 佐賀市嘉瀬地区の公民館を活用している事例。地区住民から1世帯60円ずつあつめて基金にしていること。
- 佐賀市嘉瀬地区の公民館は学校と地域、公民館の連携がよくとれていると思った。
- 太良町のコーディネーターの気配りなどがこれからコーディネーターをする方には参考になる。
- 太良町の教職員に対する研修会(3名)
- 太良町の学校地域連携コーディネーター通信の発行は大変良いと思った。今後の取組みに参考にしたい。
- 太良町は学校から支援要請を受け、感謝の手紙が出されるまでの一連の流れがしっかりとなされており、コーディネーターとボランティアの信頼関係が築かれているのにも納得できる。
- 有田町の環境整備は、機械や専門的な問題があり、地域の方の協力があって先生方も助かっていると思う。
- 有田町の茶道指導は、地域産業である有田焼を知ることや所作を身につけることにもつながり、素晴らしいと思う。

5. 講座全体について

5-① 本日の研修はあなたの今後の学校支援の活動に役立つと思いますか

	大変役に立つ	役に立つ	あまり役に立たない	役に立たない	計
人数	17	27	0	0	44
%	38.6%	61.4%	0.0%	0.0%	100.0%

無回答 3

5-② 学校支援に対して意欲・関心が高まりましたか

	大変高まった	高まった	やや低くなった	低くなった	計
人数	14	29	0	0	43
%	32.6%	67.4%	0.0%	0.0%	100.0%

無回答 4

5-③ 本日の講座の時間はどうでしたか

	長かった	適切	短かった	計
人数	7	37	0	44
%	15.9%	84.1%	0.0%	100.0%

無回答 3

5-④ 今後の学校支援の活動にどのようなテーマ、内容の研修が必要だと思いますか（複数回答可）

順位	研修のテーマ、内容	回答数	回答率
1	A 地域による学校支援の意義	26	61.9%
2	B 学校・児童生徒の現状理解	19	45.2%
3	D ボランティア同士の仲間づくり	16	38.1%
4	C 個人情報の取扱い	7	16.7%
5	F 児童生徒への接し方話し方	6	14.3%
6	G その他	5	11.9%
7	E 活動に活かせる技能の習得(パソコン操作やスポーツ等)	4	9.5%

無回答 5

5-⑤ 今後このような学校支援に関する研修会があればまた参加したいと思いますか

	ぜひ参加したい	参加したい	あまり参加したくない	参加したくない	計
人数	18	25	0	0	43
%	41.9%	58.1%	0.0%	0.0%	100.0%

無回答 4

※講座の感想や気づき、学校支援への意見など【自由記述】

- 「地域の子どもは地域で育てる」という今の取組みをさらに進めていきたいと強く感じた。
- 地域による「学校支援」良い取組みで、再来年度以降も予算をつけて続けていってほしい。
- 学校の週5日制の中で、地域と学校がどのような連携をしていくのか少しわかった。
- なぜ学校支援が必要なのか理解できた。「学校も地域も活性化する」「学校、地域が不足していることをともに補う」という言葉が印象的だった。
- 地域と学校を結ぶコーディネーターの必要性を確認した。学校の先生方への周知を計るため先生方との研修会が必要だと感じた。
- ボランティアの方の生の声を聞くことができ、課題や成果が参考になった。
- 地域格差がない様に是非、全県的にこの学社連携の研修を広げてほしい。連携、組織作りがうまく回るようにすることが大切では。うずもれた人材の掘り起こし、有効活用をお願いして、地域住民の前向きな姿勢が何より必要と思う。
- 学校支援ボランティアの取組みについてほとんど知らなかったが、地域と学校の連携を推進していく上で大変有意義な取組みだと感じた。地域で学校だけでなく地域全体の活性につながっていくよう、何かしら協力ができたらと思った。
- 学校支援が学校という組織体を支援するものではなく、子どもの成長支援であるという視点は、考えてみれば当然だが、忘れがちな視点でとても参考になった。
- 学校支援ボランティアの方々には本当に感謝している。コーディネーターを通しいろいろな方と学校は接点をもつことができた。来年度までの配置事業だがコーディネーターに頼りすぎることなく23年度からの活動を見据えて一緒に取り組んでいきたい。
- 現在コーディネーターが配置されている地域と学校との連携の様子がよくわかった。地域の活力、教育力を高めるためには、地域の人材をいかに活用するかが大切だが、コーディネーターの取り組む意欲、人柄と地域の前向きな姿勢が何より必要だと思う。
- 学習支援や部活動支援で多くのボランティアが活動されているのはすごい。ただ、事業のためにされている行事も少なくないのではと感じた。
- △県からの事業費をもらわなくても地域の中で推進できるような取組みが必要だと思う。
- △行政もある程度関わってくれば実施しやすくなるのではないだろうか。ボランティア対象、教員対象の研修が出来ていない状況が憂えられる。
- △学校(校長)によって、学校支援の意義を理解していない(理解しているが行動できていない)気がする。また、学校は受けるだけでなく、住民に与えることもあればいいのと思う。教職員に対する意識付けをもっとしてほしい。
- △「無償」がボランティアの基本ですが、コーディネーターや事業に係る事務等をするには、かなりの理解とやる気がなければ難しいと思われる。また活動で使う道具や消耗品は誰が負担すべきか。教育行政の末長い支援をお願いしたい。
- △コミュニティスクールと事業として一本化していくような見通しはないのだろうか。

平成21年度 学校支援ボランティア・コーディネーター養成講座（嬉野市出前講座） アンケート結果

講座名「地域の力を学校へ～夢をつなぐ学校支援～」 平成22年2月25日（木）14：00～16：00

講師 横尾 敏史さん（特定非営利活動法人 鳳雛塾 事務局長）

参加人数 30名 ※アンケート回収 25名/30名（83.3%）

1. あなた自身について

①性別

	男性	女性	未記入	計
人	18	6	1	25
%	72.0%	24.0%	4.0%	100.0%

②年齢

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代以上	未記入	計
人	0	0	1	1	11	9	3	0	25
%	0.0%	0.0%	4.0%	4.0%	44.0%	36.0%	12.0%	0.0%	100.0%

③対象

	A生涯学習・ 社会教育関係職員	B学校関係者	C学校地域連携 コーディネーター	D市民(すでに学校 支援ボランティアと して活動)	E市民(活動はしてい ないが、学校支援ボ ランティアに関心があ る)	Fその他	計
人	1	8	3	7	3	3	25
%	4.0%	32.0%	12.0%	28.0%	12.0%	12.0%	100.0%

2. 地域に根ざしたキャリア教育の舞台裏」事例紹介について

	とても参考になった	参考になった	あまり参考にならなかった	参考にならなかった	計
第1回	2	22	0	0	24
%	8.3%	91.7%	0.0%	0.0%	100.0%

無回答 1

※参考になった事例について【自由記述】

○神野小学校でのキッズマートの取り組み

○单元ごとの資料準備

○キャリア教育の事例はとても参考になった。紹介された小中学校の例を参考に、嬉野市でも取り組んでいきたいと思う。

○総合的な学習の時間をいかに計画するのか、コーディネーター等の活用について参考になった。

3. 「学校支援の要望をつかむコツ」について

	とても参考になった	参考になった	あまり参考にならなかった	参考にならなかった	計
第1回	2	21	0	0	23
%	8.7%	91.3%	0.0%	0.0%	100.0%

無回答 2

4. 研修全体について

4 - ① 本日の研修はあなたの今後の学校支援の活動に役立つと思いますか

	大変役に立つ	役に立つ	あまり役に立たない	役に立たない	計
第1回	1	19	2	0	22
%	4.5%	86.4%	9.1%	0.0%	100.0%

無回答 3

4 - ② 学校支援に対して意欲・関心が高まりましたか

	大変高まった	高まった	やや低くなった	低くなった	計
第1回	1	21	0	0	22
%	4.5%	95.5%	0.0%	0.0%	100.0%

無回答 3

4 - ③ 本日の研修は講義だけではなく参加者自身が考え、活動する時間も設定しましたが、このような研修をどう思いますか。

	とても良かった	良かった	あまり良くなかった	良くなかった	計
第1回	0	16	2	0	18
%	0.0%	88.9%	11.1%	0.0%	100.0%

無回答 7

4 - ④ 本日の研修の時間はどうでしたか

	長かった	適切	短かった	計
第1回	2	19	1	22
%	9.1%	86.4%	4.5%	100.0%

無回答 3

4 - ⑤ 今後の学校支援の活動にどのようなテーマ、内容の研修が必要だと思いますか（複数回答可）

順位	研修のテーマ、内容	回答数	回答率
1	A 地域による学校支援の意義	14	63.6%
2	D ボランティア同士の仲間づくり	10	45.5%
3	B 学校・児童生徒の現状理解	9	40.9%
	F 児童生徒への接し方話し方	9	40.9%
4	E 活動に活かせる技能の習得(パソコン操作やスポーツ等)	8	36.4%
5	C 個人情報の取扱い	2	3.8%
	G その他	0	0.0%

無回答 3

4 - ⑥ 今後このような学校支援に関する研修会があればまた参加したいと思いますか

	ぜひ参加したい	参加したい	あまり参加したくない	参加したくない	計
第1回	1	17	1	0	19
%	5.3%	89.5%	5.3%	0.0%	100.0%

無回答 6

※研修の感想や気づき、学校支援への意見など【自由記述】

○今後の学校支援ボランティア活動について、新しいヒントが見つかった。

○学校支援という言葉自体知らなかったので参加してとてもよかった。

△来年度からの取り組みの参考にはなったが、まだ実践していないのでピンとこない面もあった。

△ボランティアの内容については様々あり、作業等のお願いもできるかが今後の課題である。

平成21年度 学校支援ボランティア・コーディネーター養成講座（神崎市出前講座） アンケート結果

講座名「地域の力を学校へ～夢をつなぐ学校支援～」

平成22年2月27日（土）13：00～15：00

講師 横尾 敏史さん(特定非営利活動法人 鳳雛塾 事務局長)

参加人数 32名 ※アンケート回収 27名/32名（84.4%）

1. あなた自身について

①性別

	男性	女性	未記入	計
人	15	12	0	27
%	55.6%	44.4%	0.0%	100.0%

②年齢

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代以上	未記入	計
人	0	1	1	1	5	10	9	0	27
%	0.0%	3.7%	3.7%	3.7%	18.5%	37.0%	33.3%	0.0%	100.0%

③対象

	A生涯学習・ 社会教育関係職員	B学校関係者	C学校地域連携 コーディネーター	D市民(すでに学校 支援ボランティアと して活動)	E市民(活動はしてい ないが、学校支援ボ ランティアに関心があ る)	Fその他	計
人	1	1	1	17	6	1	27
%	3.7%	3.7%	3.7%	63.0%	22.2%	3.7%	100.0%

2. 地域に根ざしたキャリア教育の舞台裏」事例紹介について

	とても参考になった	参考になった	あまり参考にならなかった	参考にならなかった	計
第1回	5	18	0	0	23
%	21.7%	78.3%	0.0%	0.0%	100.0%

無回答4

※参考になった事例について【自由記述】

○キッズマートの取り組みでの実際のお金を使っでの販売体験や他店との張り合い等の体験は、人間成長に役立って良いと感じました。
○子ども達が実際に体験する場をもうけるのはとてもいいことだと思った。自分たちで考え、作り上げていくことの大変さや喜びを味わうことで、成長にもつながるし、子どもたちにとって様々な事を知り、新たな事にチャレンジする力が芽生えると感じました。

3. 「学校支援の要望をつかむコツ」について

	とても参考になった	参考になった	あまり参考にならなかった	参考にならなかった	計
第1回	6	16	2	0	24
%	25.0%	66.7%	8.3%	0.0%	100.0%

無回答3

4. 研修全体について

4 - ① 本日の研修はあなたの今後の学校支援の活動に役立つと思いますか

	大変役に立つ	役に立つ	あまり役に立たない	役に立たない	計
第1回	5	18	1	0	24
%	20.8%	75.0%	4.2%	0.0%	100.0%

無回答3

4 - ② 学校支援に対して意欲・関心が高まりましたか

	大変高まった	高まった	やや低くなった	低くなった	計
第1回	5	17	0	0	22
%	22.7%	77.3%	0.0%	0.0%	100.0%

無回答5

4 - ③ 本日の研修は講義だけではなく参加者自身が考え、活動する時間も設定しましたが、このような研修をどう思いますか。

	とても良かった	良かった	あまり良くなかった	良くなかった	計
第1回	2	19	0	0	21
%	9.5%	90.5%	0.0%	0.0%	100.0%

無回答6

4 - ④ 本日の研修の時間はどうでしたか

	長かった	適切	短かった	計
第1回	0	23	1	24
%	0.0%	95.8%	4.2%	100.0%

無回答3

4 - ⑤ 今後の学校支援の活動にどのようなテーマ、内容の研修が必要だと思いますか（複数回答可）

順位	研修のテーマ、内容	回答数	回答率
1	A 地域による学校支援の意義	12	57.1%
	D ボランティア同士の仲間づくり	12	57.1%
2	B 学校・児童生徒の現状理解	11	52.4%
3	E 活動に活かせる技能の習得(パソコン操作やスポーツ等)	4	19.0%
	F 児童生徒への接し方話し方	4	19.0%
4	C 個人情報の取扱い	2	9.5%
	G その他	0	0.0%

無回答6

4 - ⑥ 今後このような学校支援に関する研修会があればまた参加したいと思いますか

	ぜひ参加したい	参加したい	あまり参加したくない	参加したくない	計
第1回	2	16	1	0	19
%	10.5%	84.2%	5.3%	0.0%	100.0%

無回答8

※研修の感想や気づき、学校支援への意見など【自由記述】

○ワークシートで自分自身のことを確認できた。

○講師の方のような指導があればこそ、という感じで話を聞かせてもらった。良い勉強になった。

○とても関心のもてる講座で、いろいろと勉強になった。

○環境ボランティアで活動しているが、他にも色々なボランティアがあることを知った。他にもできることがあれば取組んでみたい

○講師の方が言われたように、学校からの要望をいかに引き出せるか、引き出させるかが問題だと思う。要望を出させるためにもコーディネーターの役割が重要になると思う。その溝をうめていくにも、学校訪問、話し合いの時間をもてる環境づくりが大切ではないかと感じた。

○神崎市が合併(神崎、千代田、脊振)したので、子ども達に数多くの体験をさせられたらいいと思う。

△学校支援も大事だが、子ども個人が「生きる力」を身につけさせる機会を与える事を、大人達がもっと考えるべきではないだろうか。

**生涯学習基礎データ調査研究委員
会による調査研究の成果**

Ⅸ 生涯学習基礎データ調査研究委員会による調査研究の成果

生涯学習基礎データ調査事業 調査研究委員会委員長

永田 誠（西九州大学短期大学部 講師）

1 佐賀県内の小中学校に対する調査の成果と課題

まず、今回の調査研究において取り組んだのは、佐賀県内全小中学校に対する学校支援に関する活動の実施・導入状況と、そこにおける課題点の把握でした。この調査に取り組んだ背景には、これまで幾度も学校と地域との協同関係の構築について論議されてきたものの、佐賀県における学校現場の実態が具体的データとして把握・蓄積されていないという現状があったためでした。したがって、その点のみを捉えても、佐賀県内の小・中学校が地域住民を活用した教育活動をどれほど展開し、その上で、どのような課題があるのかを具体的な数値として把握したということ自体が、大きな成果の一つであったと言えるでしょう。

また、その内実を見ると、学校における地域住民などのボランティアを活用した教育活動は、ほぼすべての学校で、かつ複数の教科及び教科外の活動で取り組まれていることが明らかとなりました。これは学校における子どもと地域住民の出会いの機会が、以前と比較して格段に増加し、且つ子どもの学びが内容・方法ともに多様なものへと変容しつつあることを示しています。

しかし、その一方で、課題も明らかとなり、①学校の窓口となる教員が不明確、②学校教職員を対象とした研修会の開催やボランティアとの打ち合わせの機会の確保が進んでいないため、双方の情報を共有する機会は未整備のままとなっている。③受け入れる教科、教育内容についても「総合的な学習の時間」などの限定的なものにとどまっているため、こうした地域人材を活用した継続的、教科横断的な教育の計画化が待たれます。

2 佐賀県学校地域連携コーディネーターに対する調査の成果と課題

佐賀県における「学校支援地域本部事業」である「学校地域連携事業」を受けている8市町11地区に配置されている校区における学校支援活動を支援するボランティア・コーディネーターに対する聞き取り調査では、コーディネーターの配置により学校と地域とをつなぐ存在が地域の中で明確化されたことによって、学校支援活動自体がよりスムーズに、そして活性化しており、コーディネーターの配置が一定の成果を見せていることが明らかとなりました。

しかし、一方で課題も明らかとなり、各市町におけるコーディネーターの位置付けや役割、活動拠点などが曖昧であるという設置する事務局体制の問題や、コーディネーター自身の業務や身分保障、就労形態、専門性が曖昧であるというコーディネーターの位置付けの問題、そして、実際の活動において問題や課題に直面した際の解決方法やそのためのコーディネーター同士の情報共有や連携体制の不十分さなども見えてきました。

以上のような調査結果を踏まえ推察するならば、学校においても、地域においても、学校支援ボランティアを導入したい教育内容や参加したいと思っているがその方途がない住民などが一定層存在していると思われます。今後、学校支援における教育的成果を精緻に分析・検証しつつ、新たな可能性を見出し、より一層の発展に向けたコーディネーターの専門性や課題解決のための情報の共有化や連携といった支援体制を確立していくことが急務となっています。

3 学校支援ボランティア・コーディネーター養成講座の成果

調査研究の結果を踏まえ、当委員会では事業モデルの開発及び検証に着手しました。具体的には、以下の2つの形態を提案しました。

A	学校教職員及び社会教育関係職員を対象とした学校支援に関する理念及び意義の理解を図るための基礎的研修会の開催
B	地域のボランティア及び実際にボランティアを活用して教育を展開する教職員を対象とした学校支援活動の具体的実践と方法についての少人数でのワークショップ形式での研修会の開催

開発・提案したプログラムを検証するべく、実際に生涯学習センターの主催事業である学校支援ボランティア・コーディネーター養成講座を活用し、Aについてはアバンセにおいて、Bについては、出前講座として神崎市と嬉野市において地域のボランティアや教職員を対象に、実際に学校支援ボランティアを活用した授業を展開する際に必要となる具体的事項について学習及び参加者相互の情報交換・共有を図りました。両講座ともに、当委員会の予想を超える参加を賜り、学校支援に関する関心の高さをうかがい知ることができました。

また、この講座を盛況に開催できた裏には、佐賀県教育委員会ならびに神崎市、嬉野市の両教育委員会のご協力とご尽力があってこそであり、関係者の皆様には、この場をお借りして深く感謝致します。

この講座においては、調査によって明らかとなった課題を主な学習の目標として設定しました。

Aでは、学校支援に関する教職員の研修会の開催やその意義の理解が一部にとどまっているという現状を受け、佐賀大学の上野景三文化教育学部長に、現代の教育における学校支援の必要性についてご講演を頂くとともに、当委員会の調査結果の報告を行い、意義と課題の共有を図りました。加えて、佐賀県における「学校支援地域本部事業」である「学校地域連携事業」を受けている市町に、学校支援活動の先進事例としてご報告頂き、フロアとの意見交換も行うことができました。

Bでは、学校の窓口やボランティアとの情報共有の機会の確保が困難であるという課題を受け、佐賀県内を中心に活躍される NPO 法人鳳雛塾の横尾敏史事務局長に講師をお願いし、講師自身が取り組まれておられるキャリア教育事業における民間コーディネーターの実践から、学校支援コーディネーターに期待されること、ボランティアとして学校に入る上で必要なことについて学ぶとともに、ワークショップを通してボランティア相互の連携や情報の共有を図った。この講座で資料として活用されたチェックシートなどは、各地での学校支援の取り組みにおいても有効であると思われるので、ぜひご参照・ご活用いただければ幸いです。

一方で、これらの研修会の開催は、開発・提案したプログラムの検証が第一の目的としてあり、開催時期の検討や十分な準備期間、そして各教育委員会へのフィードバック及び参加者の追跡ができなかった点については、心残りな点でもあります。とはいえども参加者の評価は決して低いものでなく、また、特にBにおいては、生涯学習センター主導であったものの、各地においてどのような研修会をボランティアが求めており、それにどのように答えればよいかという点を具体的に提起でき、今後、継続的な講座開催が検討されるなど、大きな反響を残したことは、この調査研究委員会の当初の目的を達成するとともに、その調査研究の結果を裏付けるものであったと言えるでしょう。

教職員、保護者、地域住民、行政関係者、そして地域団体やNPOなどが関与し、それぞれの立場の違いを超え、子どもの成長発達に向けた教育のあり方を地域住民と教員がともに議論する場の存在こそ、そして、子どもたちが地域の住民と出会い、ともに活動し、その中で人間関係を構築するとともに、先代からの生活の知恵を受け継ぎ、次代の地域の担い手としてのアイデンティティを確立することこそ、この学校支援の目指すべき姿ではないでしょうか。

4 まとめにかえて

今後、学校支援ボランティアのより一層の理解と発展を目指すためには、今回の調査研究でも取り組んだように教員と地域住民やボランティアといった支援者との情報の共有や意義などに対する理解の深化を図ることはもちろんではありますが、今回、本委員会で取り組むことができなかった残された課題として、学校支援活動自体の内容整理という点も不可欠でしょう。つまり、こういった活動では、どのような人材が求められるのか、そして、そこではどのような情報を共有しておくべきか、また、その活動によって、普段の教育活動とはどのように異なる教育的成果が得られるのかなどが整理・究明されなければならないでしょう。

そうした学校支援活動の内容として、今回の学校に対する調査データや各地の実践例を参考に、大まかな共通点をまとめてみると、表1のように整理できます。

これは私見の域を出ないものでありますが、学校での正課内及び正課外における学校支援活動の内容を、①学校教育の「補足」、②学校教育の「拡張」、③学校教育「以外」の教育的要求の3つに分類してみると、まず①の学校教育の「補足」では、主な活動例としては、「総合的な学習の時間」などを活用した自然体験活動やインターンシップなどの職業・社会体験活動、そして昔遊びや郷土料理などの生活文化継承といった生活体験活動が挙げられるでしょう。ここには校区内における保護者や地域住民がゲストティーチャーとして授業に参画し、教師と共に一人の教育者として子どもの教育に携わることになります。この活動の特徴は、あくまでも学ぶべき内容は、子どもや大人の日常生活に即した性質のものであり、教科における学習及び理解をより促進するために体験的に学ぶという点にあります。したがって、特別な知識を持たない保護者や地域住民であっても、自らの生活や経験を教授することで、子どもたちにとっての教育者としての役割を果たすことができるのです。

②の学校教育の「拡張」では、主な活動例としては、キャリア教育や環境教育、国際理解教育、異文化間教育、そして男女共同参画に関する啓発・学習や人権教育などが挙げられます。ここでは、学校における教科に関する内容には明確には位置付けられてはいないものの、子どもたちが自立した大人として成長する上で必要な知識や体験を獲得するために取り組まれる教育内容です。この活動では、その分野における専門的知識や学習方法の習得が教育者には求められるため、そうした専門性を有する者をゲストティーチャーとして招き、学校の教師はコーディネーター役となり、学習を展開することとなります。したがって、こうした学習においては、多くの場合、NPOなどで活動する専門性の高い人材が求められ、それにより費用負担や地域性といった点は重視されない傾向にあります。

③の学校教育「以外」の教育的要求としては、学校の教育内容には含まれない、または学校外や正課外での活動ではあるものの、学校がその役割や機能を担うよう要求される内容です。主な活動内容としては、登下校時の安全指導（見守りボランティア）や部活動指導、読み聞かせ活動、そして校内の環境整備活動などが挙げられます。ここでは、教育の専門性よりも、その支援者自身が有する特技や技能が重要視されます。また、授業に参画するわけではありませので、むしろ子どもとの直接的または人間的な交流が図ることができるのも、この活動の特徴の一つと言えるでしょう。

表 1 学校支援活動の分類と具体例

分類	主な活動例	活動形態	主な実施主体 (対象エリア)	費用負担
学校教育の「補足」	<ul style="list-style-type: none"> ・自然体験活動 ・インターンシップなどの職業・社会体験活動 ・昔遊びや郷土料理などの生活文化継承といった生活体験活動 	ゲストティーチャーによる授業参画	保護者、地域住民 (小・中学校区)	有償・無償 (実費負担程度)
学校教育の「拡張」	<ul style="list-style-type: none"> ・キャリア教育 ・環境教育 ・国際理解教育、異文化間教育 ・男女共同参画や人権教育 	ゲストティーチャーによる授業参画	NPO等の市民団体 (市町村・県内外)	有償
学校教育「以外」の 教育的要求	<ul style="list-style-type: none"> ・登下校時の安全指導 (見守りボランティア) ・部活動指導 ・読み聞かせ活動 ・環境整備活動 	正課外での活動	保護者、地域住民 (小・中学校区)	無償 (実費負担程度)

以上のような3つに学校支援活動を分類し、整理をしてみると、そこで求められる支援者（ボランティア）の専門性や、子どもや教師とのかかわりの度合いなどが異なることが見て取れます。つまり、内容や学習目標の設定、支援者の専門性などが異なれば、学校支援活動の企画・計画・準備は自ずとその活動に沿った形で進められるべきなのです。

また、その内容や関わりが異なることは、結果的にそこで培われる教育的成果や効果も異なることになるため、どういった学習目標を設定し、また子どもの教育的効果を期待するかという教師またはコーディネーターの役割を担う者の検討と判断、そして授業展開の創意工夫が求められるのです。

最後になりますが、当委員会において学校支援というテーマを2年間にわたり検討を重ねてまいりましたが、学校支援は新しい分野でもあり、またその定義や線引きも曖昧な部分を多く残していることも事実です。そのため調査研究を行うにあたっては、先行研究も少なく、一方で明らかにすべき課題は山積しており、委員の皆様ならびに事務局担当者などと時間を超えて熱く、そして中身の濃い議論を重ねてまいりました。しかし、この報告書が皆様のご期待に添い、また疑問に答えうる段階へ辿り着けたかは、委員長自身の知見の狭さと未熟さゆえに不安が残り、その点については、今後、関係者の皆様より厳しいご高評を賜れば幸いに存じます。

この調査報告書を手にした関係者の皆様が、当委員会をご報告させて頂いた調査結果や事業モデルを参考に、学校支援の充実及び展開に新たな一歩を踏み出す一助となれば幸いです。そして、家庭・学校・地域がそれぞれの教育機能を十分に発揮し、子どもたちを中心として佐賀県民の自己実現と社会参加を実現することができる豊かな社会が創造されることを祈念しております。

学校支援について

～調査研究委員それぞれの立場から～

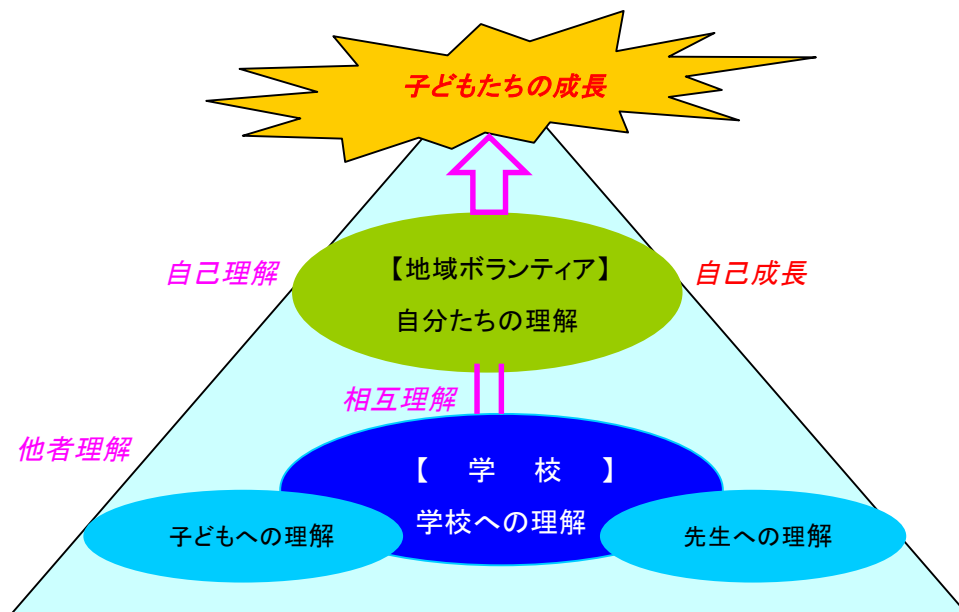
X 学校支援について ～調査研究委員それぞれの立場から～

学校支援に期待すること

生涯学習基礎データ調査事業 調査研究委員会委員

横尾 敏史（NPO法人 鳳雛塾事務局長）

地域における人的・物的な関係性が希薄になっている昨今、学校と地域がつながりを深めながら共に学びあい（共学）、育てあう（共育）学校支援活動は、すべての関係者（特に子どもたち）にとって有意義な取り組みだと考える。しかしながら、そこに関わる大人の意識のずれや理解不足、認識不足などから違和感を生じていることも事実である。価値観やものの考え方、組織文化などが多様化している現代においては、この違和感を完全に拭い去ることは難しいと思うが、多様な人たちがつながる学校支援においては、「相互理解」という基礎構築がその解決方法につながる近道ではないだろうか。コミュニケーションを円滑に行なうための前提条件が「他者理解」にあると考えている筆者としては、学校支援の第1歩は学校理解や子どもたちの理解、学校や先生の立場では地域のことを理解する努力が必要だと考える。まずは相手の立場に立って理解を深めていけば、自ずと必要な学校支援のあり方が見えてくるだろう。そして最終的には最大の目的である「子どもたちの成長」につながっていくものと確信している。



これからは、学校が地域に貢献する番

生涯学習基礎データ調査事業 調査研究委員会委員

鴻上 哲也（伊万里市立立花小学校 教頭）

世界的な労働時間短縮のうねりの中で実施された学校週五日制には、家庭・学校・地域社会の教育バランスを改善するために、家庭や地域での生活の比重を高めようとの教育的な意図が込められた。これにより社会教育に対しては、家庭教育の充実と地域教育力の活性化が強く求められることとなった。そして、地域で子どもを育てる体制づくりの有効な手段として学社連携・融合の推進が急務とされ、これが現在の「学校支援」の政策的な出発点となっている。

今回の調査研究事業を通して、本県においても「学校支援ボランティア」を新たな自己実現の場と捉え、学習の成果を生かす機会として積極的に活用していこうとする人々が増えていることが明らかになった。また、地域コミュニティの求心力を地元の公立学校に求め、学校及び児童・生徒との交流を深めることで地域の連帯感を醸成しようとする住民も少なくない。学校支援に対する関心と多様な実践が地域に広がるにつれ、学社融合は学校教育と社会教育の新たな地平を開く理念として双方の現場に定着してきているのである。

多くの小・中学校では、総合的な学習の時間を中心に、地域住民からの協力を受けて学習の成果を上げることができている。これからも、その需要は学校においてますます拡大するに違いない。しかし、地域住民の善意による行為も一方的に供与するだけでは長続きしない。住民の学校支援に向けたインセンティブを強めるために、学校が地域社会に対して、どのような貢献をなしうるかについて真剣に考えなければならない時に来ている。

学校が地域からの求めに応じ、お祭りなどのイベントで歌や踊りを披露することは昔からの定番である。近年は、学校が地場産業振興のためのオリジナルソングを作成したり、インターンシップ活動を通して商店街の活性化に寄与したりするなど、学校がその教育機能を発揮して地域振興に貢献している先駆的な実践も散見される。今後、学校はこのような地域貢献機能を強化・拡充することにより、学校と地域社会の互恵的な関係作りを進めることが大切だと思う。

事業で子どもたちに教えられたこと

生涯学習基礎データ調査事業 調査研究委員会委員

大串 弘子（有田町教育委員会学校教育課 副課長）

今朝も雨の中、小中学生の登校をサポートする地域の人たちの姿を目にしながら職場へと向かい、職場の玄関を入ると学校地域支援ボランティア募集のポスターが私を迎えてくれます。

私が、学校地域支援事業という言葉を目にしたのは二年前、生涯学習課へ異動してきたばかりの時でした。学校では、すでに開かれた学校づくりを実践され、地域では自主ボランティア組織を立ちあげられ活動されているという状況で、本当にこの事業に取り掛かる必要があるのだろうか、自問自答しながらこの事業の担当者となりました。

ある日、昔遊びの授業があると聞き、小学校を訪ねました。たくさんの地域の方々が昔遊びを指導しながら、子どもたちと交流をされているのです。子どもたちの目の輝き、教えている地域の方も夢中になっていらっしゃいます。学校地域支援事業とはこういうものだと思ったような気がしました。地域のおじさん、おばさんは子どもたちにとって甘えられる居心地のいい存在に感じているようにも見えました。

地域の成り立ちの変化が学校にも大きな影響を与えている。地域を成す一つ一つの家族の土台が崩れかかっている現状の被害者が子どもたちであるとも聞きます。

私は、地域の人たちと交流する子どもたちの笑顔が地域の力であり、家庭の力であるように感じました。元気な家庭があって、元気な地域がある。家庭にも地域にも学校にも元気な薬は、自然体で接する人と人とのつながりであることを改めてこの事業で学んだような気がします。

学校には学校の役割があります。家庭では家庭の役割、地域では地域で出来る役割、行政の役割、それぞれがこの調査委員会の結果を支援事業の指標にしていただけるものと思います。

“学校支援”の捉え方

生涯学習基礎データ調査事業 調査研究委員会委員

大橋 隆司（小城市教育委員会こども課長）

“学校支援”をどう捉えるのか。たとえば学校教育、社会教育、児童福祉といった行政の視点、また企業・事業所、ボランティア団体など、それを見る立場の違いによっていろんな意見があるのは当然なことだろう。

そうしたなかで、私が大事な視点と感じているのは、学校は子どもの教育を支える1つの構成要素であり、そのすべてではないということである。地域社会や家庭の教育力が質・量ともに落ちているといわれているが、その一方ですべてを学校が背負い込んでいるわけでもない。ただ、学校の視点としては「教師は、学校に持ち込まれる課題を抱え込み過ぎて、子どもの教育に専念できない」という現状にあり、そうした状態にどう対応するのかという視点から、この学校支援の課題が浮き彫りにされてきた感がある。

しかし、学校生活空間のなかで、子どもたちが学ぶべき教育と地域社会・家庭のなかで培われた体験を一緒に学ぶことができるのだろうか。学校支援に期待するイメージがあまりにも大き過ぎるのではないかと不安がよぎる。

個人的には、“学校支援”はその一方で確固とした社会的な基盤がなければ成立しないと思う。つまり、地域社会や家庭の教育力、そして公民館活動や事業所や市民団体のボランティア活動など、子どもを育むための地域力があってはじめて、学校への組織的な支援が可能となるのではないかと考えている。“学校支援”を地域力の再生を図る起爆剤にすることはできるだろうが、重要なことは変容する社会状況に応じた社会教育・公民館活動をきちんと展開し、家庭における教育の支援のための有効なシステムを作り出すことではないだろうか。個人の資質をいくらあげても、地域の力として組織的に醸成されなければ、その個人の寿命とともに“学校支援”も終わってしまうことになりかねない。

「学校地域連携コーディネーター配置事業」のモデル地区（小城市芦刈地区）の事務担当者として1年間だけ係わりを持たせていただいたところ、今回調査研究委員会の一員としての機会を与えていただき、各委員のみなさんからいろんな視点とご示唆をいただくことができ、大変感謝している。

夢をつなぐ学校支援 ～地域の方へのメッセージ～

生涯学習基礎データ調査事業 調査研究委員会委員

船木 幸博（佐賀県教育庁社会教育・文化財課）

「学校支援ボランティア活動は、先生のお手伝いなのですか？」

「いいえ違います。学校支援ボランティア活動は、先生の単なるお手伝いではなく、先生と共に、子どもたちの成長を支える地域の教育です。」

今、いじめや不登校など、青少年をめぐる様々な問題が発生している背景として、地域における地縁的なつながりの希薄化や個人主義の浸透などによる「地域の教育力の低下」が指摘されています。

地域全体で子どもを見守る体制の整備が、今こそ必要です。地域の子どもは地域で育てることが大切です。

地域の方が学校に関わっていただくことで、地域の教育力が活性化するとともに、学校教育の充実、家庭教育や地域の教育力の活性化という夢がつながり、地域と共に歩む学校づくり・開かれた学校づくりの支援ともなるのです。

夢いっぱいの子ども達！

夢いっぱいの学校！

夢いっぱいのまち！

そんな夢を地域全体でつなぎませんか？

子ども達を視点を地域全体がつながりませんか？

地域の方が、地域の宝である子ども達や学校を温かく見つめることで、夢がつながり、夢いっぱいのまちづくりができます。

学校支援ボランティア活動をはじめませんか？

学校支援ボランティア活動は、学校と地域の夢をつなぎます。

発行日： 平成22年3月
編集： 佐賀県立生涯学習センター（アバンセ）
発行： (財)佐賀県女性と生涯学習財団
佐賀県佐賀市天神三丁目2-11
TEL：0952-26-0011
FAX：0952-25-5591
E-Mail：syougai@avance.or.jp